COBALT-SERIES

前田珠子

天を支える者

緑の鈴を、振る



集英社

COBALT-SERIES

天を支える者

緑の鈴を、振る

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

天を支える者

緑の鈴を、振る

前田珠子

集英社

目　次

天を支える者　緑の鈴を、振る

緑の鈴を、振る……7

巫女姫（みこひめ）の銀の指環……143

あとがき……189



ガスカール

ナルレイシアの護衛を命じられた青年公爵。クールな性格で、ことナルレイシアに対して手厳しく、口を開けば毒舌ばかり。

ナルレイシア

「不幸中の幸いの権化」というありがたくない異名を持つ本好き少女。柱神さまを見きわめる「選定者」でもある！

物紹介



スカルトード

超絶美形の青年にして、とある柱神さまの縁者でもある。ナルレイシアとは「本の虫同盟」の絆で固く結ばれている。

ウォルセン

良家の子息だが、理由あって家出中。手先の器用さを活かしてなんとか生計を立てている。女装で追っ手をまいているが…？

登場人

イラスト／明咲トウル

緑の鈴を、振る

正直、その屋敷に滞在することになったときは面白くはなかった。

避暑地にある別荘に向かう途中、一夜の宿を求めた——一族内では末端に位置する家族が住む屋敷。

雲行きが怪しいという理由で、早めにその屋敷に着いた時、興味を引くものが何も見いだせず、自分は内心ため息を洩らしたのだ。

見るからに平和そうな田舎には、なんら関心をかき立てられない。しかもこの屋敷の子供はまだ七歳だという。五つも年下とあっては、話し相手にもなりはしないだろう。逆にこちらが子守をする羽目になる。

(そんなのはごめんだ)

どうせ一夜限りのつきあいなのだ。

適当に愛想良くふるまって、さっさと寝室に引き上げてしまおう——そんなことを考えながら、それでもまだ明るい内に、屋敷の周りを散策する気になったのは、馬車による移動からの開放感を多少は覚えていたからだろうか。

緑に溢れた——言い方を変えれば緑しかない屋敷の庭を、なにを思うでなく歩いていた時、ふと頬を撫でた涼しい風に気を引かれた。
かすかに、百合の花の香りが感じられたのだ。
（百合が咲いているのか？）
百合は母が好きな花だ。
もし咲いているなら、何輪か分けてもらおうか……。
そう考え、風上に足を向けた。
そこで目にした奇跡のような光景を、自分は一生忘れることはないだろう。
優しい風に包まれて、栗色の髪の子供が微笑んでいた。
空に向かって両手をのばしているその姿は、なぜか光に包まれているように見えた。
そして——空から降ってくる何本もの白い百合。
（精霊に愛された子供……）
小さな体いっぱいに、精霊たちの愛情を受けた綺麗な子供。
（近づきたい）
その思いは自然に胸に湧き起こった。
（あの子供のことを知りたい……）

そして。

（精霊たちに向けるのと同じ……あの笑顔を）

自分に向けさせたい。

突然生まれた強い感情は、恐れを抱くより早く胸の奥に根付いてしまった。

そして、数日後に、自分は知ったのだ。

精霊に愛された子供――一族の末端に生まれたあの子供が、一族の女神の愛し子であることを。

運命という言葉を、そのとき初めて噛みしめた――。

1

（最悪だ……）

本日すでに何度目になるかもわからぬため息をついて、ウォルセンはがくりと肩を落とした。

ウィーカルド・ナスター・オルス・アタラクシアによって、この屋敷に連れて来られてから、そろそろ二十日が過ぎようとしている。

マルシアス侯爵夫人アライセイドが療養しているイーヴの山荘に向かう途中、襲われてからの時間とほぼ一致している。

アシュアイードがつけてくれた護衛と結界術師を「処分した」とこともなげに告げたウィーカルドは、妄執にも似た光をたたえた瞳をウォルセンに向け、同行を促したのだ。

そばには十人ほどの武器を携えた男たち――そしてリーインに勝る実力を誇ると見られる赤味を帯びた褐色の髪の結界術師が控えていた。

拒んだところでどうにもなるものではなく、移動途中で隙を衝く方がまだしも逃げ出す可能性があると判断して、敵意は隠さないまま、それでも首肯した。

しかし、こちらの心中はウィーカルドには見抜かれていたのだろう。移動中、件の結界術師に命じて、馬車のなか、ウォルセンの周囲に結界を張らせた。

閉じ込められた格好で、ウォルセンは視覚も聴覚も奪われたまま、この屋敷に連れて来られたのだ。

だが、ウィーカルドがウォルセンの行動を規制したのはそこまでだった。

屋敷に着いてからは、ウィーカルドは完全な自由をウォルセンに与えた。逃げ出すことを考えていないとは思えないから、どうあっても逃げられない仕掛けを施してあるのだろう、とウォルセンは判断した。

そして、それから二十日――散策を装い、屋敷の内外を見て回った結果、それが間違いでないことを確信して今に至る。

屋敷の周囲には、強力な結界が敷かれてあるのだ。

見えない壁があるわけではない。屋敷からある一定の距離離れると、なぜか屋敷に戻ってしまうのだ。全方角で試してみたが、それぞれ条件付けがしてあるのか、法則性を見いだすことさえできないという代物が相手では、元々結界の知識があるわけでもないウォルセンには手も

足も出ない。

（食事に新鮮な食材が使われてるところを見れば、完全に閉じてるわけじゃないはずなんだけど……誰かに限定して術が効かないようにしてあるのか？）

あるいは、自分に限定して、絶対に出られないように条件付けされているのか――。

誰かと一緒なら、少しは違うのではないかと思い、そばにいた見張り――屋敷の警護が役目だと本人は言っていたが、第一の目的が別にあることは明白だった――を誘って、屋敷の裏側に広がる森に分け入ってみたりもしたのだが……ひとりの時と結果は同じだった。

唯一の救いは、精霊の出入りが制限されていないことだが、精霊たちに手紙や言づてを頼むという手段は使えないよう、これまた細工がしてあるのだからお手上げだ。

精霊自身には何ら影響を与えない結界壁は、なぜか物質と彼らに託された『言葉』を阻むのだ。

結界内にいた別の精霊が、落下した手紙を回収して来てくれたから助かったものの、危うくウィーカルドの手に渡るところだったと思うと、冷たい汗が背筋を伝った。

（どうしたら、いいんだ……）

きつく唇を噛みしめて、ウォルセンは窓の外に広がる夏の空を見上げた。

イーヴに自分たちがたどり着けなかったことは、すでにアシュアイードの耳に入っているに

違いない。そして、ウィーカルドたちがよほど周到に処理していない限り、襲撃された事実にたどり着いているだろう。

（あー、アッシュも小母さまも心配してるだろうな……というか、アッシュは湯気立てて激怒してるかも……）

あっさり捕まった間抜けな義弟とか、あっさり最悪の相手の手中に陥ちた阿呆な親友とか、手も足も出せずに大人しく捕まってるしか出来ない無能な役立たずとかに対して――全部自分のことだと思うと、情けなさは倍増だが、義兄の性格を考えれば、襲撃者に対して抱く怒りより、こちらの方が高確率である。

（今度会ったら、絶対「君、なにをやってるんだ」って、呆れた顔で言われる。その後笑顔で厭味を連発してくる！　あぁぁ、考えたくない――）

想像しただけで、耳を塞ぎたくなってくる。

あの一見優しげな美貌の親友は、けれど決して『お優しく』はないのだ。

もっとも、そんな厭味を聞けるような状況での再会とは限らないのだが……あえて考えないようにしているが、どちらかといえば、そんな悠長なものにはならない可能性のほうが高いことぐらいはわかっている。

自分という御輿を手にした以上、ウィーカルドをはじめとするアタラクシア家は、本気で次

期侯爵の座を狙って動き出すに違いない。

自分にその意志がないことは、再三再四伝えてきたが、彼らが耳に入れる気配はない。

ウォルセンを駒としてしか見なしていないのなら、まだ話は簡単だったろう。厄介なのは、彼らが本気で自分こそが次期マルシアス侯爵になるべきだと考えていることだ。そして、長く侯爵家本家で過ごしてきたウォルセンが、彼らに遠慮して、本心ではないことを口にしているのだと頭から信じて疑わないところだ。

彼らにとって、『聖印の子供』であるウォルセンが一族を率いるのは当然のことで、本家に生まれただけの、しかも病弱な子供が張り合おうとするのが間違っているのだ。

大切な次期当主の邪魔になる小石など、砕いてしまうことに躊躇いなど覚えない。

現に四年前――彼らはついにアシュアイードの排除に動き出した。そして、アシュアイードを推すラルクティア家は、彼にとって邪魔としかならない自分を取り除くために、やはり危険な行動を起こしたのだ。

互いこそ無事にすんだが、あの諍いのなかで命を落とした者も少なくはない。両家の諍いに巻き込まれ傷ついた者たちのことを思うとやり切れない。自分が元凶であることを知るがゆえに、詫びる言葉さえ口にできないのだ。

だが、死を選ぶことだけは出来なかったから、姿を消すことを選んだ。二度と親友と会えな

いことを覚悟して、身を潜め、逃げ続けて……。

（結局、無駄だったけどな……）

思わず自嘲の笑みを浮かべたウォルセンは、「駄目だ」と何度もかぶりを振った。

八方塞がりな状況ではあるが、ここで後ろ向きになっても事態は好転しない。せめて前向きに思考を保っておかなければ、なにかあった時、即座に動くことさえできないではないか。そんなことが自分に許せるはずがない。

（……一応、救いは、ある）

ウィーカルドに再会した際、ウォルセンはこれだけは言っておかねばならないと、はっきりと宣言しておいたのだ。

『以前のように、アッシュに刺客を送ることだけは許さない。彼が傷ついたら、同じ場所に同じ深さの傷をおれは作るから』

と。

それは以前、アシュアイードがウォルセンの自傷行為を止めるために口にした台詞だったが、本気で言えばこれほど恐ろしい効果を持つ言葉もない。

身を以てそのことを知るウォルセンは、だから本気でそう告げた。

幸いなことに、敷かれた結界には精霊たちがもたらす情報にまで干渉する仕掛けは施されて

いなかったから、これは充分実現可能な『脅迫』となり得たのだ。

ウィーカルドは一瞬にして顔色を失い、悲痛とも言える声で「誓いますから、そのような恐ろしい言葉を二度と口になさらないでください！」と叫んだ。アタラクシア家の現当主である彼の父親は病床について久しく、事実上の当主である彼の言葉に逆らう者はいないだろう……だから、そのことだけは安心していい。

（だからって、アッシュに一切手出ししないはずはないけど……）

傷をつけない方法で、必ずウィーカルドはアシュアイードを追い落とすための計画を練り、実行に移すだろう。

いや、すでに動き始めているかもしれない。そのことを思うと、ずきずきと心臓が痛む。

（大丈夫だ……きっと、大丈夫。日々の暮らしに追われてたおれと違って、アッシュは確実に力をつけてるはずだ……。アタラクシアの動きに気付いていないわけがない……）

そして、きっと対応策は考えている――それは期待や願いではなく確信だった。

（だから、絶対、アッシュは大丈夫……大丈夫じゃないのはおれの方だ……）

思うなり、またしても重いため息が出てきた。

「あー、もうやめやめ！　こういう時は気分転換に限る！」

落ち込んでいても仕方ない。

ウォルセンは棚に近づくと、その上に置かれた胡琴を取り上げた。

マルシアス本家に引き取られる以前、よく弾いていたことを調べたらしく——彼らが屋敷に滞在している間、胡琴には一切触れなかったから、他に考えられない——「気晴らしにでもなればと思いまして」と言ってウィーカルドが差し入れてくれたものだ。

繊細な装飾を施されたそれは、以前弾いていたものとは比較にならないほど高価な品だとわかったが、ウォルセンはありがたく受け取った。

行動の制限こそないが、明らかに軟禁状態にある日々のなか、気晴らしは確かに必要だったのだ。

とは言え、何年も触れていなかった指は、なかなか思うようには動いてくれない。

最初は「おれはどこの初心者だ」と呆れるほかない音しか出なかった。

未だ、以前と同じとは言い難い音色しか出せないことに変わりはないが——。

「あ、また飛ばしたか……なかなか指って動かないもんだな」

ぶつくさ文句を垂れつつも、ウォルセンの心は胡琴の音色に少しだけ上向きになる。

馴染んだ音色は記憶を直接揺さぶるものだ。楽しかった出来事、会話、笑顔——あざやかに甦る思い出に浸りながら、ウォルセンは胡琴を弾き続けた。

かすかに聞こえてきた胡琴の音色に、ウィーカルド・ナスター・オルス・アタラクシアは口元を綻ばせた。

途切れ途切れに耳に届くそれはお世辞にも巧みな演奏とは呼べぬものだが、つい聴き入ってしまう不思議な魅力に溢れている。

それは多分、音そのものの美しさが飛び抜けているせいだ。

ウォルセンが弾くと、どんな粗末な琴でも信じられないほどに美しい音を奏でるのだと――彼の母親が言っていたのを思い出す。

それは心根の美しさが音となって空気を震わせているからに違いないとウィーカルドは思っている。

精霊たちに愛される――かつて一族を救った女神の愛し子。一族を『約束の地』へと導くべく生まれてきた『聖印の子供』……当然、一族を率いるべき存在。

ウォルセン・ディーシア・オルス・マルシアス。

この自分が見いだした一族の希望であり未来である子供。

「次期さまですか……あまり、お上手とは言えませんが……」

それまで、深刻な話をしていたはずの老人の口元もまた笑みをたたえていた。

そう、技術など二の次に思えるほどに、あの音色は心に響く。

「前侯爵の愚かな選択が、あの方から琴と歌を奪って十年にもなるのだ……すぐに以前と同じように弾けるわけがあるまい。だが、技術など努力次第でいかようにもなるもの。誰にも真似できぬあの音色こそが、あの方の本質を現しているのだ。そうは思わないか？」

家臣に問いかけながら、ウィーカルドは遠くはない未来に思いを馳せる。

努力家であるウォルセンが、以前の腕前を取り戻すのにそう時間はかかるまい。その時、彼の手の中で胡琴は、どれほど美しい音の連なりを見せてくれることか。

胡琴の名手でもあったという女神ファタランテの演奏を、自分たちは彼を通して耳にすることが出来るのだ。

その時、彼は一族の長となっている。予定でも何でもない。これは確定した未来なのだ。

「……しかし、素直な音色に比べ、御気性のほうは、いささか強情でいらっしゃいますな」

不平にも聞こえるが、そう洩らす老人の目元は柔らかい。

可愛らしい意地を張る孫を見守る眼差しにも似ている——現実問題として、一向に自分の運命を自覚してくれないウォルセンの態度には、ウィーカルドとしても軽からぬ頭痛を覚えないでもないわけだが。

「仕方ない……あの方はお優しい。表面上の薄っぺらいものではない、心からの本質的な優しさを持って生まれていらしたのだ。あの方にしてみれば、義理とはいえ家族なのだ……たとえ無理矢理押しつけられたようなものであったとしても。お優しいあの方には、その家族の意向に逆らうことなど考えられないのであろう……いや、そうたたき込まれてらしたのだ。忌々しい……侯爵が、そのようなつもりだとわかっていれば、むざむざ本家の養子になど出させはしなかったものを――」

今思い出しても腹立たしくてならない。

ウォルセンが『聖印の子供』であることを知った父は、次期侯爵となる彼のためを思い、前侯爵エルセイドに真実を伝えたのだ。

傍流に生まれた彼の爵位継承を周囲に納得させるためには、本家の養子とするのが一番だと思ったからに外ならない。侯爵があっさり同意した時には、まさか息子の補佐として引き取るつもりなのだとは思わなかったのだ。

なぜ、気づけなかったのかと、病の床についた父はいまでもそのことを悔いている。

一族の希望である子供が飼い殺しも同然の扱いを受けるきっかけを自ら作ってしまったことを。

しかし、まだ遅くはない。

ウォルセンは完全に本家に――あの忌まわしい本家の息子に飼い慣らされてしまったわけではないのだから。

一年前の、彼の失踪――それを耳にした時、最初に感じたのはラルクティアがついに彼の命を摘んだのかという絶望だった。

だが、その直後からラルクティアが見せた動揺と奇妙な動きに、そうではないことを確信し、今度は歓喜した。

自分たちを頼ってくれるものだと思い、じりじりと焦がれる思いで接触を待った――勿論、こちらも本家やラルクティアに気付かれぬよう細心の注意を払いながら必死に捜して。

しかし、いくら待ってもウォルセンからの接触はなかった。自分たちを頼るつもりがないのだと言われたような気がして、どれほど嘆いたことか……。

だが、ふと気付いたのだ。彼が繰り返し訴えていたことを――あくまでも本家の息子であるアシュアイードを立てようとしていた彼の態度を。

それが侯爵によって押しつけられた考えだとしても、それでも周りを気遣わずにはいられないほど、彼は優しい少年だった。

きっと彼は思ったのだ、自分さえいなければ、と――。

アタラクシアとラルクティアの対立も、『聖印の子供』である自分さえいなくなれば治まる

に違いない、と。

ウィーカルドにしてみれば、愚かしい行為と言えなくもなかったが、だがそこにひとつの希望を見いだしたのも確かなことだった。

優しく聡明なウォルセン――彼の心が完全に侯爵の支配下に置かれていたならば、「自分さえ」との考えが浮かんだ際に選ぶ行為はひとつしかないはずだった。

自死――それこそが完璧に元凶を消す方法だ。気付かなかったはずがない。あるいはそれを仄めかされたことさえあったかもしれない。

だのにウォルセンは死ではなく姿を隠す道を選んだ。不確かで危険も多いその道を選んだ理由は、生への執着に外ならない。

彼は、生きたいのだ――本家……いや、侯爵エルセイドの支配から解放されて、自由に、本来歩むべき道を歩きたいのに違いないのだ。

そのことに気付いた瞬間、ウィーカルドは自らがなすべきことを知った。

そして今、ウォルセンはこの屋敷にいる――刺客の影に怯える必要のない、安全で安心できるこの自分の屋敷に。

完全に落ち着くには、今少しの時間が必要かも知れないが……それでも彼ならば遠くない未来に、きっとわかってくれるだろう。

自分こそがマルシアスを率いるただひとりの存在なのだと。
そのために、このアタラクシア家が命も惜しまぬ誠を尽くすかけがえのない臣下なのだと。
「だが、時ばかりは取り返せない。あの方と約束した以上、本家の死に損ないには手は出せないが……血を流すばかりが障害を取り除く方法というわけではない。輝かしく美しい未来を一刻も早く現実のものとなすために――」
くっとウィーカルドの口の端が持ち上がる。
酷薄な光を宿す双眸に映るのは、同じ光を宿す老人の笑顔だった。
「影などたててはおりますが、こうも公の場に姿を現さないのでは、不信を招かぬわけもないと……若き病弱なご子息に教えてやる者はいなかったのでしょうかな？」
揶揄も露な臣下の言葉に、ウィーカルドはくつりと喉を鳴らした。
「気付いたところでザイオン卿あたりが止めたのだろうよ。病弱で余計なことに気を回さぬ理想的な娘婿だ。扱いやすい傀儡でいてもらうためにも、いらぬ知恵をつけさせぬだろうよ」
そこが、ウォルセンとアシュアイードの最大の差だ――とウィーカルドは信じている。
自分たちは決して主を道具と見なしたりはしない。
利用しようなどとは思わない。
（ここに、真の忠誠を誓う者がいることを……どうか早く……気付いて、そして受け入れてく

ださい、ウォルセンさま……我らが希望の御子（みこ）
最早（もはや）神に向けるのにも似た想いをウォルセンに注ぐウィーカルドは気付いていない。
相手は神などではない、ひとりの人間であるという絶対の真実に。
いや、気付きたくないだけなのかもしれない――信じたいものを信じ続けるそのために。

2

いかに己が無力感に苛まれ歯がみする思いを噛みしめようと、時はゆっくりと、だが確実に過ぎていくものだと——そしてそれに伴い、心や感情にも何らかの変化がもたらされることを止める手立てはないのだと、ウィーカルドの屋敷で過ごすようになって一月が経ったころには、ウォルセンは否応なく受け入れるしかなくなっていた。

アタラクシアの屋敷における待遇は、結界の存在さえなければ悪くないものだった。屋敷の者たちも皆、ウォルセンに優しくあれこれ気を配ってくれる。

毎日訪ねてくるウィーカルドの様子も、最初のころとは違い、『聖印の子供』であることを前面に押し出しての強引な説得行為ばかりではなくなってきた。

ただ、胡琴を弾いて欲しいと、そう請われるだけの時も少なくはなく、そうして「下手なんだけど」と断りを入れてから一曲か二曲弾いて反応を見てみれば、貼り付けたような表情とは明らかに違う、心から楽しそうな嬉しそうな笑顔を向けられ「あなたの胡琴は聴いているだけ

で楽しくなる」などと言われてしまっては。
胸の奥から湧き上がってくる純粋な喜びを抑えることなどできはしないのだ。
そもそも最初にウォルセンの胡琴の音色を褒めてくれたのは精霊たちだった。
習い始めというのもおこがましい、母の指先でさまざまな音を紡ぐ胡琴が不思議で不思議でたまらず、見よう見まねで弓を引いて音を奏でたときのこと。
記憶が確かなら、それは母が生み出した美しい音色とは似ても似つかぬ騒音に近い代物だったと思う。
それでも、「こんな音が出るはずがない！」と半ば意地になって弓を動かしている内に、ほんの偶然飛び出した澄んだ響き――。
それが空間を震わせた瞬間、風霊たちが歓喜の思いを嵐のような勢いでウォルセンに投げかけてきたのだ。
――綺麗、綺麗！
――綺麗な音！　もっと聴かせて！
――弾いて、もっと他の音もちょうだい！
はしゃいだ精霊たちの様子に、少なからず困惑を覚えながらも――だが、嬉しいという思いが何よりも大きくて、一所懸命弓を動かした。

結局その日は、二度と澄んだ音を生み出すことはかなわなかったけれど。

自力ではとても精霊たちの期待に応えられそうにないと見切りをつけたのは、その三日後だったと思う。それで母に教えを請うたのだ。

突然のウォルセンの言葉に、母は驚いた様子で『なぜ、突然弾きたいと思うようになったのか、訊いてもいい？』と尋ねてきた。

当たり前だ。

それまでウォルセンは何度胡琴を勧められても『お母さんのような音が出せるとは思えないから』の一言で断りつづけてきたのだから。

演奏する者が違えば、奏でられる音は自ずと違って当たり前なのだといくら言い聞かされても、頑なに『違ったら意味がない』と拒んできたのだから。

そんなウォルセンが、何を思って、突然胡琴を自ら弾きたいと思ったのか、母が不思議に思い尋ねてくるのは当然のことだった。

『ねえ、どうして？』

嬉しそうに瞳を輝かせながら、決して引き下がろうとしない母の同じ言葉に、諦めて答えを返したのは何度目のそれに対してのことであっただろうか。

『風霊たちが……まぐれで出た音なのに、もう一度聴かせて欲しいって言って……無理だって

いくら言っても諦めてくれなくて……だんだん悲しそうになって……』

再現できるなら再現してやりたいけれど、あの音は本当に偶然に響いたもので、どうやって琴から引き出したのかもわからないままでは、決して彼らの願いをかなえてあげることはできないから。

『基本を学べば、同じ音を幾度でも繰り返し出せるんでしょう？』

そう答えたウォルセンに、母は『そうね』とうなずき、『でもね』と続けた。

『そうやって覚えた音を連ねることによって、音は流れを作り、心地よい曲となるのよ。どうせ風霊たちを歓ばせるのなら、単一の音ではなく、綺麗な音を連ねた曲を振る舞ってやりたいとは思わない？』

今にして思えば——母はひとをノせるのが上手なひとだった。

しかし当時の幼い自分は、まんまと母の手に引っかかり、胡琴に関しては常の優しい笑顔がほとんど見られない女教師に師事することを決めてしまったのだ。

……まあ、おかげで精霊たちは大喜びし、後々『あとで胡琴を弾いてあげるから』と言えば、大抵の願いは聞き届けられるようになったというありがたいおまけがついてきたわけではあるのだが。

（あー、今更だけど、おれって周りが喜んでくれることに関して、ことさら努力してきたよう

な気がするな――）

マルシアス家に引き取られ、侯爵エルセイドの方針で――一族の女神ファタランテを連想させる要素は極力持たせないようにした結果だろうと指摘したのは、皮肉にも侯爵が一番守ろうとしたに違いない、彼の妻と嫡子であるアライセイドとアシュアイードだったのだが――胡琴も歌も禁じられた状況に置かれた時は、正直言ってきつかった。

だが、自分の歌や胡琴の演奏がアシュアイードに危険を招くと言われてしまっては、我慢するより仕方ないと諦めた。

アシュアイードは、ウォルセンのなかで唯一無二の存在であったからだ。

彼を脅かすいかなる不安要素も、ウォルセンは認める気にはなれなかった。だから、言われるがままに胡琴も歌も封印した。

死にかけていた自分の唇に、何度も何度も桃の果汁を指でぬってくれた――そうして、心まで救ってくれたアシュアイードに代えられるものなどなかったからだ。

けれど、そのことで精霊たちが嘆くのは、また別の痛みをもたらすもので。

アシュアイードを脅かす影になどなりたくないという思いと、精霊たちを喜ばせてやりたいという願いの板挟みになって苦しんでいたウォルセンをすくい上げてくれたのは、やはり義兄と……義母だった。

『内緒でやってしまえばいいのよ』

いともあっさりと言い切った彼女を前に、差し出された胡琴を受け取ることも、拒むこともできずにいた自分は……唖然とした。

『要はエルセイドにばれなければいいのよ。幸いにしてわたしは個人契約している結界術師もいることだし、その結界のなかでなら、あなたがいくら胡琴の腕や歌声を披露してもエルセイドには知られることはない……ね、いい考えでしょう？』

だから、わたしとアッシュのために、せいぜい励んでちょうだい？

絶句するしかなかった。

助けを求めるべく向けた視線の先で、極上の翡翠の双眸を持つ親友はそれはそれは楽しそうな笑みを浮かべており。

『おれも聴きたい』

などと応じてくれる始末。

結局、鈍った感覚で奏でた胡琴の曲も、鍛錬を怠った喉が紡いだ歌声も、耳の肥えた観客であるふたりを満足させるには至らず、その際下されたあまりの酷評に、『このまま引き下がってなるものか』などと負けず嫌いな気性を刺激されたせいもあって――。

（結局、ふたりのおかげで胡琴も歌も鍛えられたんだよなー。ふたりとも容赦ない性格だか

ら、少しでも怠けたら、びしばし指摘してくるし……うーん、今思っても気の抜けない恐ろしい聴き手だった……）

それに比べれば、ウィーカルドをはじめとするアタラクシア家の一党は甘すぎる。

こちらが音を外そうが飛ばそうが、気付いていてもよしとしてしまう。

（けど……）

それでも嬉しいと、耳に届く音色に対して嘘偽りなく感じているのが伝わってくるのだ。

否も応もなく、その伝わってくる感情を嬉しいと思ってしまう自分が確かにいるのだ。

（どうしよう……）

この屋敷に連れて来られた当初には、浮かびもしなかった期待が生まれ、その可能性を育ててしまいたいという思いが膨らんでしまうのを止められない。

自分の奏でる胡琴の音色に、陶然とするウィーカルドたちの心のこわばりが溶けていくのが感じられるのだ。

（もし、このままおれがここに留まって、胡琴の音色に思いを託したなら……もしかしたら言葉だけでは伝えきれない思いまで、伝えることができるかもしれない……）

それがかなうなら——本当に、それが可能なことならば。

かなえたい、とウォルセンは思った。言葉だけでも響きだけでもわかり合うことは出来ない

かもしれないが、ふたつが重なれば――言葉だけではほぐせぬ心が音色でほぐされ、音色だけでは伝えきれない思いを言葉で伝え合うことができれば、あるいは――。

避けられぬ諍いがないなどとは思わない。

だが、避けられるものならば力を尽くして避けるべきだ。そして、自分の言葉や奏でる音色がその一助となるのなら――そう思った自分は甘かったのだろうか。

呆然と、ウォルセンは立ち尽くしていた。

屋敷の裏手にある小さな香草園のそばで、風霊たちが気まぐれに拾ってくるひとびとの声を耳にした瞬間、脳裏が真っ白に焼き切れたのだ。

「……首尾は……丈夫……抜かりなど……」

「では確実に、証拠固めは……」

「穴などない、これで言い逃れは……」

「父親殺し……次期侯爵はこれで……」

(何を……誰が、何を話してるんだ……?)

この一月ほどで以前に比べ、好意に近い感情を抱くようになった青年の声が耳に突き刺さる――その言葉の内容ゆえに。

ウィーカルドの声が紡ぐのは、前侯爵エルセイド殺害犯特定に関するものだった。

それに伴ういくつもの気になる言葉が茨のように胸に絡みつく。
――これで言い逃れは利かない。
――父親殺しとなれば、いかに直系とはいえ、推す者も消えよう。
――次期侯爵はこれで自ずと……。
認めたくなくとも、これでは認めざるを得ない――ウィーカルドは、前侯爵エルセイドの殺害の主犯として、アシュアイードの名を挙げるつもりなのだ！
（アッシュが……？）
そんなことはあり得ない。
なのに……心底から信じて、彼を糾弾しようとしているのか？
それとも、都合が良いから……？
あるいは――最初から、そう計画していたとでも？
（アッシュを、罪人に堕とすつもり、だった……）
ぷつん、とウォルセンのなかの何かが切れた。
次の刹那、じわり、と左の手首が熱を帯びた。

在ることさえ認識していなかった、内なる『力』が暴走した瞬間だった――。

3

瞼の奥に、光が乱舞するのが視える。
全身が熱くなり、胸の奥からなにかがせり出してくるような苦しさを覚え、ウォルセンは知らず唇を震わせた。
(あ……？　なに……なにが……!?)
疑問を浮かべるより先に、感情が爆発する。
ウィーカルドが、アシュアイードを陥れようとしている——たったひとつの事実が、彼から感情の制御を奪い取り、そうしてそれが大きな力のうねりに呑み込まれると同時に。
ウォルセンの全身から、緑味がかった金の光が溢れだしたのである！
「うわあぁぁっっ！」
荒れ狂う力そのものが、彼の体から噴きだし、放射状に放たれる。
(ウィーカルドが……アッシュを……アッシュをっっ！)

脳裏に浮かぶのは、ひとつ年上の親友の顔だ。
優しい光を翡翠の双眸にたたえ、真っ直ぐに自分を見つめる大切なひと。
『ディー』
あんなにも優しい声で自分を呼んでくれるひとを、他には知らない。
あんなにも自分にやさしいひとを、他には知らない。
命を拾ってくれたひと——この肩にかかる重荷を代わりに背負うから、だから一緒にいて欲しいと、それだけしか望まなかったひと。
自分がなにより大切に思う人——決して傷つけたく……否、傷つけてはならないひと。
(アッシュ！)
その彼を、ウィーカルドは冤罪を着せて陥れようとしているのだ。
許せるはずが、ない。
わかりあえるのではないかという幻想は、きれいさっぱり霧消した。
いま、この胸に滾るのは、ただただ純粋な怒りだ。
(許さない！)
そんなことが認められるわけがない。
一刻も早く、こんな場所から離れ、アシュアイードにこの企みのことを伝えなければならな

いというのに、強大な力で築かれた結界がその邪魔をする。
瞼ごしに視える、屋敷を取り囲む光にもにた不可視の壁――これが邪魔だ。
(邪魔なんだ)
睨みつけながら、ウォルセンは意識して力を壁に叩きつける。
この壁さえ壊せれば、ここから出て行ける――アシュアイードの元へ駆けつけることができるのだ。
(壊れてしまえ！　アッシュを傷つける者は許さない！　アッシュを辱める者は許さない！　アッシュを貶める者は許さない！)
溢れだした金緑の光が、巨大な竜の姿を取ったことに気付かぬまま、ウォルセンは結界に怒りのすべてをぶつけ続けた。
それでも、結界は軋みながらも崩れない。
(もっと力が……ある……あるはずだ。もっと力を……もっと、もっと、もっとっ！)
体の奥にある力、すべてを絞り出しながら、ウォルセンは壁を叩く。
まるで全身を雑巾のように絞られるかのような激痛が走ったが、構いはしなかった。
この結界さえ消えれば――ほかにはもう、なにも考えられない。
(砕けろ！　千々に砕けてしまえっ！)

痛みに震える唇で、ウォルセンは叫んだ。
「おれの……邪魔を、するなぁぁっっ！」
カシャン、と薄いガラスが砕けるような音ならぬ音が周囲に響き渡ったのは次の刹那のことだった。
金緑の竜の顎に噛み砕かれて、屋敷を覆い尽くしていた結界は消失した――。

突然屋敷を襲った衝撃に、部下と密談中だったウィーカルド・ナスター・オルス・アタラクシアは瞠目した。
空間が軋み、壁といい天井といい、屋敷中……否、屋敷を包む空間全体が見えぬ力に引き裂かれるかのように悲鳴を上げていた。
「なんだ、なんなんだ、あれは!?」
なにが起こったというのか――眉宇をひそめたウィーカルドの耳に廊下から聞こえてきた家人の叫びが届いた瞬間、彼は窓に向かって駆け寄っていた。
そこで彼は、我が目を疑うモノを目撃することとなる。

一年と少し前、王都ロスタロイドを震撼させたという黄金竜の突然の出現――いままさに、その再現としか思えない光景が繰り広げられているのだ！

巨大な金緑の竜が、うねるように宙を舞っている――窮屈そうなのは、屋敷を包む結界のせいだろうか。

「馬鹿な……」

なぜ、ここに竜が現れるのか――いや、あれは幻か？

（だが、だとしても……ただの目くらましの類ではない……）

ぴりぴりと肌を突き刺す怒りの波動は、間違いなく金緑の竜から放たれている。

なにがどうなっているのか、皆目見当がつかない。それでも、竜が鋭い牙を剝き、打ち砕こうとしているのが結界であることだけは明白だった。

（ウォルセンさまが招来なさったのか……!?　あの方のお力は精霊の恵みのみではなかったのか……!?）

想像もしなかった、だが喜んでばかりもいられない新たな事実に、ウィーカルドは口元に手を当てた。

（しかし、なぜいま……？）

この屋敷に来てすぐのころは、常に逃げ出す隙を探していたのは知っていた。

だが、自分が差し入れた胡琴を弾くようになり、その演奏を自分たちが請うようになってからは様子が明らかに変わった。

『まだまだ元通りとはいかないんだけどね』

恥ずかしそうに言いながら、それでも楽しそうに弓を手に取り、曲を奏でてくれるようになった。

以前は義兄や義母の前でしか見せなかったような柔らかな笑みも、少しだけだが見せてくれるようになったし、『好きな曲があるなら』と、こちらの希望を尋ねてくれることさえも増えて……それは、彼がここを安全な場所だと、そして自分を信頼できる相手だと認めてくれた証だった。

それが嬉しく、だからその笑顔を守るために、自分は彼の輝かしい未来のために力を尽くそうと思っていたのだ。

なのに、この突然の彼の行動はなにを意味しているのか？

その答えは、空気を震わせることなく響き渡った『叫び』によってもたらされた。

――許さない！

耳にではなく脳裏に直接響くそれは、まぎれもないウォルセンの怒りに満ちた声だった。

――アッシュを傷つける者は許さない！　アッシュを辱める者は許さない！　アッシュを貶

（……そういうことか……）

ウィーカルドはため息とともに、苦い思いを吐き出した。

ウォルセンが精霊たちに愛されていることを知っていながら、これは明らかに自分の過失と言えるだろう。風霊たちは恐らく、自分たちが交わしている会話の内容をウォルセンに伝えたのだ……。

「ウォルセンさま……」

優しい主の放った言葉の刃に、ざっくりと傷ついた心から、止まることなく血が溢れ出すのを感じた。

（聡明なあなたが、なぜあの毒蛇の本性に気付かれないのです？　優しげに見えるだけのあの笑顔の下に、どれほど狡猾で残酷な気性が潜んでいるのか……そばにいたからこそ、あなたに見えぬはずがないというのに……）

それとも、と思う。

（偽りとわかっていても、縋らずにはおられぬほど、本家における孤独は幼いあなたを傷つけ追い詰めたのですか……？）

感じるのは、本家の者たちに対する怒り――いや、すでに憎悪と呼べるかも知れないものだ

った。

だが、いまなすべきことは別にあった。

（止めなければ）

ウォルセンを止めなければならない――何があろうと。

この計画は、完璧な秘密裏に準備してこそ成立するものなのだ――洩れたが最後、あちらは反撃の牙を剝く。

互いに命がけの戦いと言ってもいい。

ウォルセンが導く『約束の地』を見るために、ここで外ならぬ彼によってもたらされる危険を看過することはできない。

「どこだ……!?　あの方は……ウォルセンさまはどこにおられる!?」

結界を壊す行為など、すぐにやめさせなければならない。

（それに……この、触れるだけで心臓が握りつぶされそうな圧倒的な力……いかに精霊たちに愛されたお方といえど、これは人間には過ぎたものだ……）

強大すぎる力は、扱いを誤れば容易く破滅を運ぶものだ。

怒りに我を忘れていると思しきウォルセンが、この力に逆に呑み込まれるようなことになれば……いったいどうなるというのか。

焦りと恐怖に胸が早鐘を打つ。

（止めなければ……一刻も早く、ウォルセンさまを……っ！）

そう思うというのに、圧倒的な力にさらされたウィーカルドの体はぴくりとも動かない――全身が石になったかのように、指先ひとつ動かすこともできないのだ。

触れた力に本能的な震えに支配されているというのに、自らの意志では何も出来ないのだ！できるのは、ただ縋るように希うことだけだ。

（おやめください、ウォルセンさま！　あの毒蛇すら愛しむお心があるのなら、それはあなたに従う我らに向けるべきです……あなたを唯一の光と思う我らをどうか思い出してください……ウォルセンさま！）

どうか、怒りを鎮め、真のあなたの味方である我らを見てください――！

悲鳴にも似たウィーカルドの願いは、しかし天には届かなかった。

――砕けろ！　千々に砕けてしまえっ！

怒り一色に染め上げられた声ならぬ声が、命じる言葉を紡ぐ。

屋敷が、空間が――包みこむ結界ごと、軋みをあげる！

そして。

――おれの……邪魔を、するなあぁぁっっ！

目前に立ち塞がるすべての障害を、躊躇も容赦もなくなぎ払う決意に満ちた怒声が空を震わせた次の瞬間――。

カシャン、カシャン、シャン、シャラン……。

ごくごく薄い硝子が砕ける時に奏でるような澄んだ響きが、周囲を満たした。

ウィーカルドだけでなく、屋敷中の全員が、その刹那、なにが起こったのかを本能的に悟っていた。

結界が、内側から砕かれたのだ。

（なんということを……）

絶望が胸を支配する――ウィーカルドは、それでも真実に目を向けようとしない主を恨むことさえできない自分に気づき、自嘲した。

（本家ではなく、我が家で保護していれば、こんなことにはならなかったのだろうか……？）

いまや、言っても詮無いことだとわかっていても、自問せずにはいられなかった。

すべては終わってしまったと、そのときウィーカルドは信じて疑っていなかったのだから。

しかし、そうではなかった。

情けないことに、そのことに気付いたのは周囲の家人たちの言葉を言葉として認識したときのことだった。

「竜が消えたぞ！」

はっとして、窓の外の空を見上げれば、確かにあの金緑の巨大な竜の姿が消えていた。

同時に気付く――体だけでなく心までも縛り上げて一切の動きを許さなかった、あの絶対的な気配と力もまた、消失していることに！

（なにが……）

起こった？

疑問に思ったのは、しかし一瞬のこと。次に浮かんだ本能的な恐怖ゆえに、ウィーカルドは声を張り上げた。

「ウォルセンさまっ！」

唐突な竜と気配と力の消滅――人間の身には過ぎた力を揮った者は、その身を力に引き裂かれてしまうのではないのか!?

「ウィーカルドさま!?」

周囲の声など最早耳には入らなかった。

ようやく支配を取り戻した肉体で――足で、自らの意志を以て全力で駆けた。

金緑の竜の尾があったと思しき場所に向かって。

胸のなかの混乱はまだ治まりきっていない。

なぜ、あんな毒蛇のためにそこまでのことを。
人が良すぎるにもほどがある。
天性の聡明さが、なぜあの青年に関してだけは発揮されないのか。
なぜ、自分たちを見てくれようとしないのか。
向こうの都合のいいように利用されようとしていることに気付いていないはずもないというのに、なぜ逆らおうとすらしてくれないのか。
脳裏に浮かぶのは、ウォルセンに対する不満ばかりだ。
恨みといってもいいかもしれない。
それでも——それらの不満を招く要因はすべて……ウォルセンの美質であることがわかるだけに恨みがましくとも憎悪することはできないのだ。
胡琴の音色が伝えてくる彼の本質が脳裏に過る。
純粋だけれど、多少の歪みや汚れで濁らされることはない強さを持つひと。
聡明なくせに騙されやすいのは、不浄を胸に抱きしめてもなお、揺るがぬ足場をしっかりと持つがゆえの……いわば副作用のようなもの。
優しすぎて度量が大きすぎるがゆえに、毒でしか我が身を守ることのできない『弱者』への哀れみを捨てることができないのだ……。

（けれど、我が君、我が主……っ！）

あなたを慕い、求めているのはその毒蛇だけではないのです――。

（我らこそが誰より強く、あなたを……あなたの導く『約束の地』を求めているのです！　どうか、早く……一刻も早く、そのことに気付いて下さい……！）

けれど、もう、これまでと同じようにはできない――。

結界がウォルセンの力によって内側から砕かれた――その瞬間に、結界の干渉を受けなかった精霊たちが世界中に飛び出したことは疑いようのない事実だ。

精霊の声を聞く者は、少なくはあるがそれだけであれば稀少とは言い難いぐらいには世界中に存在している。

気まぐれで忘れっぽい風霊だから、飛び出した全部が先ほどの騒ぎを伝えるとは限らないが、誰一人にも伝わらないとは思えない。

だとしたら――相手は確認の言葉を託した精霊を送り返してくるはずだ。

それに、ウォルセンを関わらせてはいけない。

そのためには――そのためであれば。

「やはり……」

胸が破裂しそうなほどの勢いで、駆けつけたその場所――金緑の竜の尾があると思えた地点

……屋敷裏の小さな香草園の外れに、緑味がかった栗色の髪の青年が、力尽きたように倒れていた。

「ウォルセンさま」

駆け寄り、その手首を摑んだ瞬間、ひやりとするものがウィーカルドの背筋を伝った。

（冷たい）

夏だというのに、その体は雪に長時間埋もれていたかのように冷え切っていた。

「ウォルセンさまっ！」

かき抱いたウォルセンの唇は土気色――かすかに開いたそこから洩れる弱い呼吸音が、その命の営みが絶えていないことを示すのみだ。

喪失の恐怖に、ウィーカルドはそれ以上その場に留まっていられなかった。

ウォルセンの体を抱き上げ、大声を張り上げながら、彼は屋敷へと戻った。

「医者を！　暖炉に火をくべろ！　いや、それより先に湯だ！　温かい湯を用意しろ！　体温を戻さなくては……ああ、ウォルセンさま！」

死なないで下さい！

心からそう願いながら、ウィーカルドの脳裏に別次元の考えが走る。

先ほど目にしたばかりの、ウォルセンが放った奇跡への対応策だ。

（かけがえのない我が主……けれど、あなたの力は危険すぎる……）

わらわらと集まり、指示を待つばかり家臣たちに、ウィーカルドは命じた。

「急ぎ、結界術師に新たな結界を築かせよ。精霊の関与を完璧に排除した結界を、だ。さらにその内部により密閉性の高い封印の一室を。申し訳ないが、ことの決着がつくまで、この方にはそこでおとなしくしていていただく――」

いただかなければならない――。

もはや、ウォルセンの意志は関係ない。

ウォルセンは自分たちにとって希望の光である以上、その役目を果たして貰うより他ないのだ。

引き返すことが出来ぬ賭けに、すでに出てしまった以上。

「精霊に関わる可能性のない部屋に閉じ込める……あくまで一時的にだ。この方の奏でる胡琴の音の魅力は痛感しているから、間違っても精霊たちに聴かれることのないよう、胡琴は取り上げて……ああ、それでもどんな隙をついて来られるかもしれない……駄目だ、駄目だ、手も足も自由にしては……っ！」

そうして、ウィーカルドが下した指示は――。

ウォルセンの全身を拘束する内容でしかなかった。

4

「アシュアイードさま」

黒鷲城の奥まった一室――窓に厚い覆い布が掛けられ、昼間だというのに蠟燭が灯された薄暗い室内に、女性の声が響いた。

頭から頭巾を被り、さらに目元に紗を巻いた奇妙な格好をした女性の目線は、しかし正面に置かれた水晶玉に向けられている。

肉眼で見つめているのではない。心眼とでも呼ぶべきもので、彼女は水晶の奥になにかを視い出すのだ。

「見つかったかい？」

穏やかに女性に声をかけるのは、褐色の髪に極上の翡翠を思わせる双眸を持つ青年だった。

アシュアイード・ヴィーオラ・オルス・マルシアス――。

マルシアス侯爵家の嫡男にして、現在当主代行を務める彼は、明らかな安堵の色をその瞳に

たたえていた。

女性がこくりとうなずくと、アシュアイードは小さく息をついた。

彼女の占術が外れたことはこれまでなかった——視えぬものがないことはないが——彼女が見つけたというのなら、それは間違いなく捜しものの行方が知れたと言うことだ。

（ディー……）

命の危険がないことはわかっていた。

なにより、大切な義弟であるウォルセンを、本人には知らせず囮に使ったのは外ならぬ自分なのだ——彼を害する者たちの手に、一時でもその身を委ねるつもりなどない。アタラクシアの手の者だけにウォルセンのイーヴ行きが知れるよう手配したのも、警護にあまり腕が立たず、忠誠も疑わしい……いわばなくしても惜しくない者たちばかりを配置したのも、すべては彼を向こうに預けるための演出に過ぎなかった。

アシュアイードの意図した通り、アタラクシア家のウィーカルドは素直に餌に飛びついてくれた——ウォルセンという極上のそれに。

そこまでは予定通りだった。

唯一の誤算は、ウィーカルドがウォルセンをどこに隠したか、占術師の力を以てしても今日まで摑めなかったということだ。襲撃された場所の様子から、相当手練れの結界術師がいるこ

とはわかったが、ここまで手こずらされるとは思わなかった。
すべての準備は整っているというのに、ウォルセンの居場所の特定ができないがために、無為に時間を費やしてしまった――追い詰められた一党が自暴自棄になった挙げ句、彼に危害を加えることがないとは言い切れぬからこそ、絶対に確実な情報が必要だったのだ。
「それで、ディーはどこに？」
安堵を覚えたからこその苛立ちが声に混じる。
（あの程度の輩にこれほど手こずらされるとは）
ウィーカルド・ナスター・オルス・アタラクシアが聞けば、怒髪天を衝く感想に違いないが、アシュアイードにとっては彼はその程度にしか認識されてはいなかった。
だからこそ、一時的にでもウォルセンを委ねることを認めたのだ。
決して彼を傷つけず、一族の意見をまとめる上で申し分のない『獅子身中の虫』となり得る絶好の存在として。
（……もっと、早く解決できるはずだったのに……）
予想外の結界術師のせいで、思わぬ時間を食ってしまったことが悔しくてならない――が、それはそれだ。
ウォルセンの安全が確保できた以上、最早待つ必要はない。

口元に笑みをたたえて問いかけるアシュアイードに、彼の占術師は短くひとつの地名を告げた。

「ウェルス西南かと」

アシュアイードは素早く脳裏の情報から答えを引き出した。

「ウェルスか……確か別荘があったはずだな……なるほど、本宅にいるのは影というわけだね。道理でこちら側との面会はことごとく断るくせに、親族には会うわけだ……」

わかりやすすぎる対応に、更なる裏を勘ぐったこちらは馬鹿のようではないか。

だが――その理由が絶対的な結界に対する信頼にあったのだとすれば、それが崩されたいま――。

（王手、だ）

東方の盤遊戯における言葉を脳裏に浮かべながら、アシュアイードはうっすらと微笑んだ。

そんな彼に、占術師がなにか言いかけたが、しかしそれは言葉となることはなかった。

アシュアイードの身を包む空気が、それを許さなかったのだ。

（ディー……）

待っておいで、と彼は胸中でささやいた。

（もう少しだけの辛抱だ……もう、誰にもわたしたちが共にあることを責めさせたりはしない

……誰にも、文句は言わせないから……）

だから、戻ってきたら、今度こそ誰にも憚ることなく胡琴をかき鳴らし、その歌声を放ってくれ――。

アシュアイードにとって、孤独に押しつぶされそうになりながら、夜中の寝台の中で、ウォルセンが呟くように紡いでいた歌が、初めて心を打ったものだったから。

自分や母が求めても、どこかで遠慮せずにいられなかったウォルセンの姿を知っているからこそ、願わずにはいられない。

（今度こそ……ディー。心からの君の胡琴の音色と歌声を……）

そのために、いまは修羅の道を選ぶ。

マルシアス一族にとっても、これは必要な粛正だと認識しているからこそ。

（でも、君はそんなものは見なくていい）

寧ろ見て欲しくはない。

それはアシュアイードの心からの願いでもあった――。

不意の来客は、ウィーカルドの影を務めるだけの存在である彼には荷の勝ちすぎる内容を携えていた。

「ウィーカルド・ナスター・オルス・アタラクシア。マルシアス前侯爵エルセイド・アリアナ・オルス・マルシアス死亡に関わる重要な情報を持つ参考人として拘束させていただきます」

本家の警邏を勤める役人の口上に、影たる男の頭は真っ白になった。

それは、こちらから仕掛ける作戦ではなかったのか!? まさに同じ罪状で以てアシュアイード・ヴィーオラ・オルス・マルシアスを捕縛するというのが当初の計画ではなかったのか!?

準備はすでに整っていると聞いていた。

だから、本家からの客と聞いても、その報告だと信じて会うことを認めたのだ。

警邏組織だけは、一族のいかなる権威にも膝を屈することのないそれだと認識し、さらには別の展開が用意されていると聞かされていたのだから!

それでも、ここで捕縛されることが自らの破滅を意味することだけはわかる男は必死に叫んだ。

「冤罪だ! おれはウィーカルドじゃない!」

致命的な失言をしたことに、彼はついに気づけなかった。

「そうですか。では、詳しいことを聞かせていただかねばならないようですね」
警邏隊の責任者らしい男が、得たりとばかりに口元を緩めた。
その瞬間、彼は自分が雇用主の罪を暴くための証人に選ばれたことを知った。

遠くでひとの足音が聞こえる。
ひどく慌しい複数のそれに、ウォルセンはびくりと肩を震わせた。
偶然耳にしたウィーカルドの言葉の内容ゆえに、彼は怯えずにはいられないのだ。
(アッシュ……どうか、無事で……)
祈ることしかできない不甲斐ない自分が情けない。
(どうしてあの時、感情を抑えられなかったんだ、おれは……)
あんな風に衝動的に力を揮って、挙げ句に力尽き、意識を失うなど……失態としか言いようがない。
もしもあれが自分ではなくアシュアイードであったなら、あのような無様な真似はしなかったに違いない。恐らくはなにひとつ素知らぬ顔で、虎視眈々と千載一遇のチャンスを窺ったこ

とだろう。

（そうすれば……こんな風に自由を奪われることもなかったはずだ……）

自嘲に唇を歪めながら、ウォルセンは寝台に横たわったまま、右手を動かした。

ジャラリ、と耳障りな音がする。

両手首と両足首にはめられた枷につけられた鉄鎖が奏でる、到底好ましくは思えぬ響きには、いつまでたっても慣れることができない。

（まあ、こんなのに慣れたら人間としてお終いのような気もするけど……）

ふう、と息をつきながら、それでも意識は扉の向こうに集中させる。

（いつもと違う……？　まさか、ウィーカルドがついに動いたのか!?　いや……それにしてはなにか……）

妙だ、と思った瞬間、ウォルセンの耳は信じられないものを拾った。

「ぎゃあぁっっ！」

男の悲鳴だ――そうと認めた途端、胸に別の不安が押し寄せてきた。

（襲撃を受けている？　まさか……ラルクティア家か!?　だとしたら……！）

心臓が早鐘を打つ――もしも襲撃者がラルクティア家の手の者であれば、自分を無事にすますはずがないのだ。

（死ぬわけにはいかないのに！）

アシュアイードとの約束がある――なにがなんでも生き延びなければならない約束が。

だのに、手足は枷に繋がれ、部屋の扉に近づくことさえ出来ないのだ！

（死ねない……おれは、絶対に……！）

そう思った時、左の手首がかすかに熱を帯びるのを感じた。

覚えのある感覚だった――そう、あれはウィーカルドの計画を耳にした時……確か、あのときも左手首が熱を帯びたのだ。

（なんだ!?）

左手をあげて、異変の正体を確かめようとしたウォルセンは、しかしそれより早く開いた扉に意識を奪われた。

抜き身の剣を構えた男達が駆け込んでくる。

その出で立ちには覚えがあった――平時には領内の治安を守る警邏隊には、しかし隠された一面がある。

それは、侯爵直属の戦闘組織としての顔だ。侯爵家ではなく侯爵そのひとにのみ忠誠を誓う集団――それが、いまここに現れたということは。

（アッシュ……が……？）

差し向けてくれたのだろうか——エルセイド亡き後、彼らに命令権を持つのは正式な当主代行であるアシュアイードだけだ。

他には考えられない。

果たして、男達の口から飛び出した叫びに、体の強ばりが解けた。

「おられました！」

「ウォルセンさま、よくぞご無事で！」

（……助かった……）

深く息を吐き出した後、ウォルセンはゆっくりと起き上がった。

ジャラリと相変わらず鉄鎖は鈍い音をたてたが、もう気にはならなかった。

悪夢は悪夢のまま——現実となることなく終わったのだ。

なぜだ、なぜだ、なぜだ!?

こんなことは起こりえない！

完璧な結界に守られているはずの屋敷に侯爵直属を名乗る部隊の突入を受けて——そこま

での現実を目にしても尚、ウィーカルドはそれを認められなかった。
手向かう家人たちを一切の迷いもなく容赦なしに斬り捨てる兵士達――その剣をつきつけられて、ウィーカルドは初めて敵とした相手……アシュアイードの本質に触れた、と思った。
毒蛇の質だとは思っていた。
狡猾にして油断のならない、首尾をもってすべてを動かす相手だと。
生まれながらに背負った病弱な体が、その性質を支えているのだと。
信じて疑いもしなかった。
だのに……こんなことがあるのだろうか!?
「なぜだ……なぜ、こんなことに……!?」
警邏の兵士に床に押さえつけられながら、ウィーカルドは呆然と呟いた。
いったい計画のどこに齟齬が生じたというのだろう――こうして罪人として押さえつけられるのはあの毒蛇であったはずなのに、と。
それに対して、隊長格の男が哀れむような目を向けた。
「愚かしい野心に取り憑かれた時点で、貴公の命運は尽きていたのですよ。畏れ多くも前の侯爵を毒などという卑劣な手段で殺害し、その罪をご子息になすりつけようなどと……しかも、聖印の子供であるウォルセンさまを利用するために拐かすとは、理のかけらも見いだせぬ行為

です。あの方はすべてを見通されておいでしたよ」

男の言葉に、ウィーカルドは「違う！」と叫び返した。

「わたしは正統なる侯爵を立てようとしただけだ！　女神の愛し子であらせられるウォルセンさまを次期侯爵にと……聖印の子供だと、お前も今言ったではないか！」

血走った目で睨みつける彼の言葉に、しかし男は感銘を受ける風もなかった。

否、ウィーカルドを見下ろすその双眸に、先ほどまではなかった怒りの色が宿る。

「……だから、それをよしとなさらなかった侯爵に毒を送りつけたと？　更には貴公の考えに賛同なさらなかったウォルセンさまを、手枷足枷で自由を奪った上で従わせようとした……？　独善にもほどがある。虫ずが走る！」

その言葉に、ウィーカルドははっと息を呑んだ。

自分のなかでは罪などではない正当な行為が、周囲には認められないことにここでようやく気付いたのだ。

「わたしは……わたしはただ、ウォルセンさまに相応しい権利と地位を差し上げたかっただけで……間違ってもあのような毒蛇の補佐で終わるようなお方ではないと信じるからこそ……だから……」

必死に野心などではないのだと訴えかけるが、その言葉は相手の心には届かない。

「それが独善だというのですよ……まあ、いいでしょう。貴公は犯した罪に値する罰を受けるがよろしかろう。ウォルセンさまは、返していただいた……もし、あの方の衰弱がもっと激しかったら、貴公の命はこの場で潰えていただろう。あの方が自らの足で歩かれたことに感謝するのですね」

それきり、用はすんだとばかりに男はウィーカルドに背を向けた——最早話すことはないと言わんばかりに。

事実、ウィーカルドにはこのとき、口にする言葉を持たなかった。

自らの敗北という形で、舞台の幕が下りるのを、ただ感じ取っていた……。

5

舞台は変わり、時もまた前後する。

ウォルセンがアシュアイードの命を受けた警邏隊によってアタラクシア家から解放される実に一月ほど前のこと。

ディエーン南部に位置する街――イェイシス。

街で一番の格式を誇る宿屋『金糸雀苑』の、これまた最上格の一室において、寝台の住人である黒髪の青年と、陽光を紡いだかのような金髪に、蜂蜜色の双眸の少女が、ここのところ恒例となった抗争を今日も繰り返していた。

「そんなもん、食えねえって何度言ったらわかるんだよっ!?」

全身の半分以上を包帯で覆われた青年が、決死の形相で少女が差し出した椀を押し戻そうとしている。

しかし、少女も負けてはいない。

渾身の力をこめて、青年に椀――というかその中身――を受け取らせようとしている……まあ、つまりは食べさせようと。

「あなたの偏食につきあってたら、いくら待っても回復なんてしっこないじゃない！　いいから食べなさいってば！　病気の時は滋養のあるものが一番なんだからっ！」

「これのどこが滋養のある食べ物だってんだ!?」

この生臭さ満載の代物が！

悲鳴と怒号が相半ばする、なんとも異様な叫びでもって指さされたのは少女が差し出した椀の中身である。

一見したところ、それはありふれた粥だった――ただしのせられたものを除けばの話だ。

真っ白な粥の上にのせられたもの……それは、てらてらと何とも言い難い光沢を放つどす黒いという表現がぴったりな、円形のナニカの薄切りであった。

幾種かの香草でその癖は抑えられてはいるものの、完全には消し切れてはいない……敏感な者ならその黒々したものから匂うのが血のそれだとはっきり認識できるだろう。

「なによ！　新鮮な豚の血の腸詰めの輪切りをのせただけじゃない！　あれだけ大出血したんだから、血の補給は必要でしょう!?」

「だからって、粥にあわせるか、普通!?」

「昔本で読んだわよ、血の煮こごりみたいなの、ハーンでは普通に粥にのせて食べるって！　それと似たようなものじゃない。いいから食べなさいって！」

ごりごりごり、少女は退くつもりはなさそうで、ひたすらに椀を青年に押しつける。

一方、青年もまた受け取る気は皆無らしく、あくまでも受け取りを拒否している。

「そういうのは確かにあるがっ！　はっきり言って、おれは嫌いなんだよっ！　いくら滋養があろうが生臭いのは一切駄目なんだって！　何度言やあわかるんだっっ！」

体の半分を包帯に包まれた状態で、渾身の力を振り絞り椀を少しでも遠ざけようとする青年と、何が何でも受け取らせようとする少女の攻防は、このままでは永遠にも続きそうな勢いだった。

そして、ここでいつものようにひとつの声が割って入るのだ。

これもまた、ここ数日……青年が意識を取り戻し、なんとか軽い食事ならば口に運べるようになって以来、恒例となっている。

「まあまあ、小鳥姫」

言葉だけ聞くと、あまりの気障さに全身の肌が粟立ちそうなのだが、意外にもその手の悪寒を招かないのは、偏にその言葉を紡ぐ声が魅惑的――過ぎるとも言える――だからだ。

耳にするだけで、心が蕩けてしまいそうになる高すぎもせず低すぎもしない美声の主は、声

だけでなくその姿も人外魔境としか表現しようのない極上の美の結晶だった。
緑がかった金の髪は、まるでそのものが光を放っているかのよう。
しみ、皺はおろか黒子ひとつない滑らかな肌は極上の白磁とも雪花石膏とも喩えられるもの……時に髪同様自ら輝きを放っているかのように感じることさえあることを思えば、最も相応しい形容は真珠の肌、だろうか……。
長い睫に縁取られた涼やかな目元、高すぎず低すぎず、絶妙な高さを誇る鼻梁は真っ直ぐで。やはり絶妙な形と大きさの唇とが配置された全体像は奇跡としか言いようがない。
それもまた然り。
なぜならその存在は『人間』ではないのだから。
この世界の天と地の狭間――『空』を支える神のひとりであるのだから。
何度目にしても決して見慣れることができない――そう言う割にしっかり順応している、とは周囲の言だ――美貌の柱神の横槍に、金髪の美少女……ナルレイシアはぷう、と頬を膨らませた。
「だって、ネイスリーズさま、このひとの注文聞いてたら、ハーン産の高山人参だとか、キノコだとか、海草だとか……！　このディエーンでは手に入りっこないものばっかりあげるんですよ!?　代用品を用意するしかないじゃないですか！」

文句言いながら、結局最後は食べるくせに！

がうがうと唸る少女の肩にポン、と手を置いて、ネイスリーズが慰めるように告げる。

「ああ、ここはいいから、君は君で食事を済ませてきなさい。空腹のせいで苛立っているのがわかるよ」

イライラしているのは自覚していたので、毎度のごとく引き下がるより他ない。

いつも、なぜだかこうしたやりとりが繰り返されていることに薄々気付いてはいるのだが、いつもこれ以上踏み込めないなにかを感じてしまうのだ。

それはどこかの黒髪陰険公爵の毒舌を思わせる結界術師の青年の口撃ゆえだったり、人外美貌の柱神の笑顔が醸し出す何とも言えない空気圧ゆえだったりするのだが。

今日こそは踏み込んでみせる――との決意は毎日くじかれてばかり。

そうして今日も……くじかれた。

「……わかりました」

なんだか微妙に負けたような気分を味わいながら、ナルレイシアは戦線離脱――何と言うことはない、リーインに椀を押しつけることを諦めて席を立っただけのことなのだが――した。

（今日も食べさせられなかった……悔しい……）

重篤な状態で見つかった人間に少しでも滋養のあるものを食べさせたい――純然たる厚意か

ら始まったはずのナルレイシアによる栄養食提供計画は、頑なまでのリーインの拒絶によって今や微妙に……いや、かなり、意味合いを変えつつあった。

「うーん、血の腸詰めは不評だったか……他に造血作用を促す食べ物といったら……うーん、レバー？」

リーインの大量出血で失った体力を戻すメニューを考えるのは、すでに習慣となりかけているナルレイシアは、『金糸雀苑』の大食堂のテーブルについてもぶつぶつと呟いている。

思い込んだら一直線なひとだと、アゼルフィアは小さく息をついた。

「ナルレイシアさん、体力なくて胃も弱ってるひとに、強烈な味付けのものは無茶だと思いますよ」

気持ちはわかりますけど、普通の病人食の方が喜ばれるんじゃありませんか？

そう言い諭すのは、実のところは……リーインのためではない。

宿の厨房を借りて、ナルレイシアが特製栄養食を作る度、ご相伴に与る身として、そろそろ勘弁してほしい、という思いがあるからだ。

ただでさえ夏場であっさりしたものが欲しいというのに、彼女の作る料理ときたら栄養満点なのはともかく、こってりした味付けのものが多いのだ。

「う、ん？　そうかな？　じゃあ、どんなものがいいと思う？」

どうやらアゼルフィアの言葉に一理あると認めてくれたらしい彼女の問いに、口を突いて出たのは――自分の願望以外の何物でもなかった。

「えー、と。ここのところ暑い日が続いているし、ここはあっさりした冷スープ麺だとか……？」

「そうか……喉ごしいいものねえ……具をたっぷり載せれば栄養価も問題ないし……とすると、なにがいいかな……？」

自分の食事もそっちのけで、「あっさり風味を壊さない具ね、だったらやっぱり……」などとつぶやき始めたナルレイシアに、アゼルフィアは苦笑しながら食事を促した。

盆の上の料理はまだほとんど手つかずのままだったのだ。

だが、ナルレイシアがそのまま食事にとりかかることはなかった――なぜなら、その時食堂に現れた人物が声をかけてきたからだ。

「ヴィル・ダカール、ヴィル・カランタ、いまお食事ですか？」

近づいてくるのは、四十代半ばと思しき恰幅のいい男性だった。

この宿の主人――ナーディアン・オリアン・ワランテだ。

「あ、ナーディアンさん、こんにちは」

アゼルフィアのなかでは『良い人』認定されている貴重な人物でもある。

なにしろ癖が強く『いい人』とは素直に評せない面々とつきあっているだけに、彼との会話は貴重な癒しの時間だった……少なくとも、気を張り詰める必要はないのだから。

しかし、ナルレイシアは少し違うのか、蜂蜜色の双眸を一瞬煌めかせると、素早く笑顔をはりつけて、にこやかに応じた。

「こんにちは。いつも厨房をお借りしてご迷惑おかけしてます」

ぺこりと頭を下げる様子は、並外れた美少女であることを除けば、そのあたりにいくらでも見つかるような年頃の娘だ。

何度も殺され掛けて生き延びてきた強者には到底見えない。

（ほとんど素なんだけど、確かに作ってるのよねぇ……すごい演技力）

感心半分呆れ半分、こっそりつぶやくアゼルフィアだった。

そんな彼女の心中を知ってか知らずか、ナーディアンとナルレイシアのにこやかな会話は続く。

「お気になさらず……至尊の方を守るために戦われた勇者のためです。いくらでもお好きなよ

うにお使いください。なにか足りないものなどありましたら、言づけて下されば手配もいたしますよ」

柱神の連れだということで、ナーディアンの対応はどこまでも丁寧だ。

アゼルフィアなどは、そんな彼に警戒すべき点などあるとは思えないのだが、ネイスリーズとナルレイシアにはほかに考えがあるのか、アゼルフィアをひとりで彼に会わせようとはしない。当然、対応はそばにいるナルレイシアかネイスリーズが担当することとなるのだが、これがどうにも和やかで、アゼルフィアはどこらへんが駆け引きなのかもわからない。

（下手に口を挟んでボロを出しても困るから、お任せしちゃうけどね……）

ナルレイシアはともかく、自分の盆の上の料理は大半が片付いている。

ここは早々に退散したほうがいいかもしれない。

（下手なことぽろっと洩らしたり取り返しがつかないことになるかもしれないし……）

たとえば緑の神宝翠唱子のことだとか、その半身確定のマルシアス家の青年のことだとか、ナルレイシアが実は選定者であることとか……。

ナーディアンの巧みな話術に乗せられて、ついうっかり、という事態は避けたいところだ。

「あのー、お先に失礼してもいいですか？　ちょっと、ネイスリーズさまにお訊きしたいことがあるもので……」

声をかけると、ナルレイシアが目だけで笑ったのがわかった。
「あ、うん、わかった。あと、具はなにがいいか、アゼルフィアも考えてねー。わたしもこれを片付け次第、一度部屋に戻るから」
ナーディアンが引き留めるかとも思ったが、それはなく、内心ほっと息をつきながら、アゼルフィアはテーブルを後にした。
（秘密が多すぎて、口を開くのも怖いだなんて状況、陥りたくはなかったなぁ）
なんてことをしみじみ思いながら。

「……逃げられてしまったかな」
ナーディアンがぽつりと洩らした声に、ナルレイシアは「やっぱり狙いはアゼルフィアだったか」と思い、内心で思いきり顔を顰めた。
顔に出すようなことはしなかったけれど。
それは相手も同じことで、苦笑混じりに「こんな小父さんとでは話すのも気詰まりなんでしょうね」と冗談めかして前の言葉を他意なきものだと示してくる。

この『金糸雀苑』に……否、マルシアス侯爵領に入ってからというもの、ひしひしと感じてきた違和感の正体を、今やナルレイシアはある程度理解したと思っている。

それは、故郷であるフィレアでも王都ロスタロイドでもついぞ感じたことのない、周囲から向けられる視線と関心のそれでもある。

個人の抱く好奇心とは明らかに違う、強烈な関心を巧みに隠しながら、ナーディアンをはじめとするこの地方の者たちはこちらから少しでも多くの情報を引き出そうとするのだ。

あからさまに話術が巧みな特定の人物がいるというのなら、対象を絞ることもできるが、周囲全部がわざとらしくない範囲でそれぞれにこちらからの情報を引き出していくやり方というのは……気付いてしまえば脅威でしかない。

そもそも気付けたのは偶然だった。

ネイスリーズが柱神であることは、その人外魔境な美貌のおかげであっさり信じてもらえたわけだが、宿に落ち着いて数日経ったころだろうか、周囲の対応が明らかに——とは言っても、ネイスリーズに指摘されなければ気付けなかっただろう程度のものだったのだが——変わったのだ。

気さくな笑顔で話しかけてくるナーディアンは、最初こそネイスリーズに近づきたい素振りを見せていたのが嘘のように、ナルレイシアやアゼルフィアがひとりきり、あるいはネイスリ

ーズがいない時を見計らって接触するようになった。
話題は専ら「ネイスリーズを賊から守るために重傷を負った」ことになっている『ライ』こととリーインの容態についてだったが、さりげなくこちらの情報を引き出しにかかってきたのである。
それは、ひとつひとつは本当に他愛のないもので、自分たちの生まれがどこだとか、どうやってネイスリーズと知り合うことになったのか——等々。しかも、あからさまに尋ねるのではなく、アクセントの微妙な違いや身に染みついた仕種などから、「古い知り合いが……」だの「以前滞在なさったお客様が……」などと、もっともらしい前置きを置いてこちらが自ら答えを口にするように持って行くという巧妙な手口を使うのだ。
それが、ナーディアンや『金糸雀苑』の従業員だけに限ったものでないことに気付いたのは市場でのこと——アゼルフィアと連れだって新鮮な食材確保のために朝市を訪れたナルレイシアに、露店の主と思しき若い男が声を掛けてきたのだ。
「そこの道行くお嬢さん！　たっぷり実の詰まったクルミは如何だい!?」
季節はそろそろ真夏に差し掛かろうとしている——こんな時期に、高級料理店相手の問屋でもない露店に、季節外れもいいところのクルミが並ぶというのはいかにも妙だ。
しかも、ナルレイシアはその三日ほど前に、『金糸雀苑』の食堂で、「これが秋ならクルミと

鶏肉の炒め物で滋養たっぷりの一品ができるんだけど……」とアゼルフィア相手に零したことをしっかり覚えていた。

ぞわりと、背筋に得体の知れぬ震えを感じたのはその時だった。

（もしかして、主立った店だけじゃなくて、街全体……ううん、もしかした領内に住んでるひとたちの大部分が、わたしたちのことを観察してなにがしかの情報を引き出そうとしている……？）

浮かんだ疑問は、すでに確信に近かった。

だから、アゼルフィアにはなるべく単独行動を控え、さらには自分かネイスリーズがそばにいる時は極力口をきかないようにと念を押したのだ。

（それでも……街中の誰とも口をきかないだなんて無理だから、どうせ大半の事情は流れてしまってるんでしょうけどね……）

内心で苦笑しながら、ナルレイシアはディエーンの王家や多くの貴族たちから異端視されてきたマルシアス侯爵家が、これまで深い傷を受けることなく生き延びてきた理由を垣間見たように思った。

結束力が違うのだ。

恐らくは派閥争いのただ中であっても、外敵が出現した瞬間にでも、マルシアス領内の勢力

はひとつにまとまるだけの絆を築いているのだろう。
けれど、とだからこその不安が胸を過る。
強い絆で結ばれた一族なればこそ、反目の溝もまた尋常でなく深いのではないだろうか。
だとしたら――リーインからもたらされた情報が脳裏に甦り、ナルレイシアは不安を覚えずにはいられない。
侯爵家直系の嫡子と、一族の伝説的存在である『聖印の子供』……。
どちらも絶対的引力を持つ二者を、それぞれ違う勢力が担ぎ上げようとしたならば。
その対立はどれほど深刻なものになるかも知れない……。
（本当は、対立する必要なんてないのに……）
ウォルセンは神宝翠唱子に半身として選ばれた。
新たなる緑属の柱神となる身だ。侯爵家の後継者争いとは無縁な存在なのだ。
けれど、今はまだそれを明らかにすることはできず、だからこそリーインから聞かされた事情に心は乱される。
警護の兵士を皆殺しにされ、リーインもまた不可抗力でその場を離れた――というか、飛ばされた――後、ウォルセンが襲撃者の手に落ちたのは間違いない。
そこまで手段を選ばぬ者たちの元で、ウォルセンがどれだけ安全と自由を保証されているの

か……考えるだけで胸が痛くなる。

（ウォルセンさん……どうか、無事で……！）

祈ることしか今はできない――ウォルセンの安否に関しては。

けれど、ほかのことに関しては、まだ出来ることはあるから――。

（とにかく、まずはやれることを全力でやる！）

胸中で固く握り拳をつくって、ナルレイシアは取りあえず、現在目の前にいるナーディアンを相手取った芝居に専念することにした。

6

「護衛の方の意識も戻り、ひとまず安心というところですかな」
ナーディアンの言葉は労いの響きに満ちあふれていたが、ナルレイシアは曖昧な笑顔でうなずくことしかできない。
一見穏和そうにしか見えないこの『金糸雀苑』の主の目には、穏やかな光の奥の奥に隠された謎めいた光があると知っているからだ。
「お陰様で……」
しかし、ここで隙を見せるわけにはいかない。
「ナーディアンさんのおかげで宿の厨房まで使わせていただいて……本当に感謝してます。食材も……イェイシスって、ものすごく物流がいいんですね。欲しい食材がすぐに手に入るんで本当にありがたいと思ってます」
にこにこにっこり——胸中でつぶやく呪文は「わたしは女優」……板についてきた感がある

のがなにやら切ない。

「御領主さまが出来たお方で、薬と食料に関しては領内のどこであってもほぼ滞ることのないよう整備されているんですよ。御領主一族が将軍として戦場に赴かれることも多かったことがあって、医師の必要性を身を以てご存じで、医師の育成には力を注いでらっしゃるんですよ。昔と違って戦がない今でも、医術の研究は盛んでね。おかげで学問所できちんと医術を学んだ医師が領内中に配置されていて……お連れの護衛の方にすぐに腕利きの方を紹介できたのも、その環境が物を言ったと言いますか……」

ナーディアンの言葉はいかに代々のマルシアス侯爵が素晴らしいひとであったのかという自慢話とも受け取れるが、一概に『身内贔屓』と片付けられない内容を孕んでいる。

医師の育成、さらにはその治療における必要とされる薬草類の流通経路の確立――。

どちらも、そこに住む者たちにとっては願ってもないものである。

しかし、一部の国や地方を除けば、まだ「画に描いた餅」に近い状況であるのも確かなことなのだ。

大国とされるディエーンにあってすら、大都市を除けば医師を呼ぶのも困難ということは珍しくない。

まず、正規の教育を受けた医師の絶対的数の不足。

そして腕のいい医師を『万が一』の時のために囲い込みたがるある種の富裕層の存在。
民間療法や呪いに頼って終わらせる民の意識――。
マルシアス侯爵領でも、その手の問題は皆無ではないだろう――しかし、それらは他領に比べ圧倒的に少ないに違いない。
（それが、代々のマルシアス侯爵がなしてきた結果……）
それゆえに、民の心は侯爵に従って離れない――。
恐らくは領民達は絶対的信頼ゆえにほぼ無条件に侯爵家のために働くことを厭わないのだ――領民すべてが侯爵の盾となることを望んでいるのだ、恐らくは。
（扱いが難しい一族だってガスカールが言ってたけど、確かにこれは細心の注意が必要だわ）
ナルレイシアは内心こっそり息をついた。
領内に入った時点で、自分たちは侯爵の監視下に入ったことは自覚していた――だからこそ、住民達に噂を流すことで、確実に会える段取りをつけるつもりだったのだが……この街の様子では、かなり危険な綱渡りになりそうだ。
（とにかく、こちらの本当の狙いは絶対見抜かれないようにしないと……侯爵代行をしてるひとが、どれだけウォルセンさんのことを大事に思ってたとしても、侯爵家全体の問題だと認識したら違う判断が出てくるかもしれないのだし……）

ウォルセンを担ぎ上げようとしている一派の手に、彼の身柄が陥ちたことは、リーインから聞いて知っているナルレイシアだ。

この状況で彼の命運を決するかもしれない情報は洩らしてはならない——幸い、ナーディアンの興味はネイスリーズが持っている『妙歌星ファタランテ縁の品』に向いている様子なので、下手なことを口走らない限りは大丈夫だろうが。

（ま、縁の品に関しては、特別秘密にしなくちゃならないようなこともないし……）

適度に情報は流した方がいい——ただ、それをさりげなくやるというのが難しいのだが……最強の呪文を胸に、ナルレイシアは小首をかしげてナーディアンを見やった。

（わたしは女優！）

「そう言えば、面白いんですよ。ネイスリーズさまに見せていただいた女神さま縁の品って胡琴って言うらしいんですけど、変わった模様の螺鈿細工が施されてるんです。普通螺鈿に使われるのは真珠色の貝の内側なんですけど、それはなぜか紅珊瑚が使ってあって……それだけでも珍しいのに、その形が変わっているというか……」

ナーディアンの眼光が『紅珊瑚の螺鈿細工』のところで一際強くなったのを気付かぬふりでナルレイシアはくすくすと笑い出す。

果たして、『金糸雀苑』の主は食いついてきた。

「なにがどう、変わっているのかお尋ねしても……？」

遠慮がちな態度を忘れないあたりは、さすがに人生経験が違う――と認めるしかない。

が。

（ひとまずは、こっちの情報に食いついてくれただけでも充分！）

相手には気付かれぬよう、こっそり握りこぶしを作りながら、ナルレイシアは張り切って女優になった。

「ああ、はい。というか、わたしもちらっとしか見たことないので、正確な図案とは限らないんですけど……綺麗な紅珊瑚の螺鈿細工なのに、何故か三日月が背中で汗を掻いてるみたいなコミカルなもので……妙歌星さまって、実はお茶目な方だったのかしらとか思って……」

「ヴィル・ダカール！」

……『縁の品』の信憑性を増すために、敢えて洩らした情報である。

嘘偽りは一切混ぜていない……その模様の意味を知らないからこそ、ナルレイシアは正直な感想を口にしたのだ。

つまり、『三日月が汗を掻いている』みたいだと。

その言葉からナーディアンが『翼のある蛇』の緋色の痣――を連想したことなど、当然のことながら彼女には知るよしもなかった。

「は、はい？」

予想外のナーディアンの大声に、本気でびっくりして背筋をのばした彼女の態度に、ナーディアンはなにを感じ取ったのか「いえ」とだけ応じた後、「驚かせてしまったようですね、すみません」と如才なく謝ってきた。

そうして、その後にナルレイシアが「それにしても見事な細工で……」などと胡琴のことに触れようとしても、「ああ、そうですか、さすがは素晴らしい」などと、明らかに気のない様子で言葉を返すのみとなった『金糸雀苑』の主は、早々に席を立った。

（本拠地にこの情報を一刻も早く送るつもりなわけね）

ナーディアンの意図は読み取れたものの、単なる『ネイスリーズの世話役の少女』という役回りのナルレイシアとしては、ここであれこれ突っ込むわけにもいかないし、アゼルフィアをこの場から逃がすために――たとえそうは見えなくとも――それなりに気を遣い、精神的疲労は極に達していたのもまた事実で。

「おっと、お食事の邪魔をしてしまいましたね……よろしければ、温かい物を用意させましょうか？」

（わかってて、邪魔したくせに）

わざとらしいナーディアンの提言に、にっこり笑顔で応じるのもまた『女優』の務めのひと

つ。

「いいえ、お気遣いなく。夏場で食欲が湧かないのを、連れが気を回していつもより多い品数を無理矢理盆に載せただけのことですから……」

にこにこにっこり――。

笑顔で答えれば、相手はそれ以上突っ込んでこない。

（よしっ！　っていうか、なにが当たったのかはわかんないんだけど、ここは取りあえず良しとしとこう！）

かなりいい加減な認識で、ナルレイシアは席を立つナーディアンを見送った。

内心、別のことをしっかり思いながら、だ。

（リーイン・ル・ファン！　しっかりはっきりきっぱり、説明して貰いますからねぇえっっ！）

その心の叫びを感じたのかどうか、未だ病床にある結界術師の青年がびくりと肩を震わせたのかどうかは……永遠に謎のままである。

「どういうこと!?」

部屋に戻るなり、ナルレイシアはリーインに摑みかからんばかりの勢いで問い詰めた。

その剣幕に驚いてか、漆黒の瞳を大きく瞠った結界術師に、彼女はまくしたてる。

「あなた、まだなにかわたしたちに話してないことがあるでしょう!? ナーディアンさん、胡琴の螺鈿のことを聞いたとき、目の色が変わったわよ！」

どういうことだ、と詰め寄ると、青年は困惑した面持ちで「なんのことだ」と問い返してきた。

「しらばっくれるつもり!?」

絶対に、彼がなにか隠していると思っているものだから、ナルレイシアの口調はきついものとなる。

それに対して青年は動じる様子もない。

「しらばっくれるもなにも……おれこそ訊きたい。胡琴の螺鈿って何のことだ?」

「なにって勿論……」

マーシャスの女神と呼ばれた妙歌星ファタランテさま縁の品のことに決まっている——そう言いかけて、ふと思い出した。

（あ、そういえば……ここに着いて以来、一度も包みを解いてなかったような……仮にも柱

神さま縁の品をむき出しにしておくのはおかしいからってネイスリーズさまが仰って……。確かに怪我人がいるせいで、お医者さまとか宿のひととかの出入りも多かったし……）

　ということは、リーインは胡琴の実物を見たことがないわけで、当然紅珊瑚による螺鈿の図案のことも知らないというわけで……。

　怒りがすっと冷めると同時に、ひどくいたたまれない気分に襲われたが、ここで「ごめんなさい、わたしの勘違いだった」と謝ったところで、青年が退くとは思えず、ナルレイシアは結局恐る恐る確認のための言葉を紡いだ。

「……えー、と。もしかして、見せたこと、なかったっけ……？」

　語尾が弱くなるのは仕方ない。

　しかし、やはりと言うか、リーインはそんな彼女の態度の変化を黙って見逃してはくれなかった。

「……何を？」

　思わせぶりな間が厭味である。

　こちらが怯んだと見るや、青年が皮肉な笑みを口元に浮かべてたたみ込んでくる。

「そう言えば、おれの知ってることはあらかた話したはずだが、そっちの事情についての詳細は教えてもらってなかったよな」

誰かさんが妙な栄養食にこり始めたせいで――。

栄養食の部分に力をこめるあたり、連日のナルレイシアが用意した特別食に心底辟易していたらしいことが窺える。

（や、やっぱりこの夏場に、こってり味付けの料理ばっかりじゃきつかったかしら……？）

じっとりとこちらを睨んでくる目が怖い。

「ええっと……だから、次はあっさりしたスープ麺にしようかと思ってはいるんだけど……」

「それは正直ありがたいね……で、胡琴ってのは何のことだ？　大体、ウォルセンを捜し出して神宝を受け取るよう説得するためにアシャスに向かってるってことは聞いたが、侯爵……いや、今は代行だな。その代行にどうやって面会を求めるつもりなんだ？　侯爵が変死したことは話しただろう？　それを隠している今の状況じゃ、いくら本物の御柱が出向いたところで、そう簡単に応じてくれるとは思えないんだが……」

しかも、あの綺麗な御柱はディエーンの方じゃないだろう？

どう考えても侯爵代行と接触できるとは思えないんだが――。

「それは大丈夫……のはず。……って、ネイスリーズさまが仰ってた。マーシャスの女神と呼ばれるファタランテさま……あ、妙歌星の異名で知られる柱神さまだったらしいんだけどね、その方縁の品を、彼女の末裔である侯爵家に届けるという名目だから……」

一族が女神と崇める方のことだから、蔑ろには出来ないでしょう？

「そうかも知れないが……胡乱に思われるのは間違いないぞ。マーシャスの女神って、あれだろう、五世紀以上も昔の方だろうが。そんな方に縁のある品なんて、現存してるって普通は考えないだろうが」

痛いところを突かれた。

それは、ナルレイシアも気付いてはいたのだ――それでも、信頼するファティ・リンシャやネイスリーズが大丈夫だと太鼓判を押してくれたことと、他に方法がないということで、無理押しは承知で策に乗ったのだ。

そのとき、部屋の扉が開くなり、人外美貌の柱神が現れた――背後に後光が射して見えたのは……ナルレイシアの期待の顕れだったのだろうか。

「普通じゃない方が大切に保管庫に突っ込んでらしたおかげでね、この通り美品で残っているんだよ」

そう言いながら入ってくるネイスリーズの手には、包みを解かれた胡琴が握られていた。

見てみるかい――柱神の差し出した胡琴を、リーインはつられたように受け取った。

まじまじと見るその眼差しは、真剣そのものだ。

（というか……なんか、鑑定されてるみたい……）

こっそりとナルレイシアは思ったが、もちろん口には出さない。

せっかくネイスリーズの登場で、リーインの口撃から逃れられたのだ。下手なことを口にして矛先をこちらに引き戻すのは得策ではない。

「……元は、女神のご実家で代々大切に保管されていたらしいんだがね。最後のひとりが知遇を得たさる方に委ねたという話だ。しかしその方も、当時は国を離れるわけにはいかないお立場でね……ようやく自由になられた頃には、さすがに足腰……っと、体も無理がきかなくなってらしてね。そういうわけだから、更にその知り合いであるわたしが代理で侯爵家に届けることになったというわけだ」

すらすらと筋書きを口にするネイスリーズを、リーインが凝視したまま、ぽつりと呟いた。

「……胡散臭い」

「それは受け取る人間次第だね。ありがたい奇跡と思うか、なにか罠が仕掛けられているのではないかと疑うか……しかしね、いくら疑われても今回は大丈夫なんだ。なにしろ……これは実話だからね。まあ……託された方が自由になられたのは二十年ほど前のことだとか、ご本人がこの騒ぎが起こるまですっかり失念されていたとか、ちょっとばかり隠していることはあるけれど、ね」

ネイスリーズの言葉を聞く内に、ナルレイシアの脳裏にひとりの女性の顔が浮かんだ。

以前国を守る立場についていて、二十年ほど前に自由の身になって、いまは足腰もとい体が弱っているという、柱神である青年――一見――にすら敬語で語られる存在。

そんな人物（？）はひとりしか思い浮かばないではないか。

（ファティ・リンシャ……すっかり忘れてらしたんですね……？）

だが、そのおかげで今回の策が実現したのだから、そのことには感謝すべきだろう。

一方、リーインもなにか感じるところがあったのだろう、呆れたような声を洩らした――視線はなぜかナルレイシアに向けられている。

「……凄い強運だな」

褒められているような気になれないのは何故だろうか――。

多分、それ以上に凶運のほうが多いからだろう。

「話はわかった……ああ、それで紅珊瑚の螺鈿ってのはこれのことか。なるほどな、この宿の主は、侯爵家にかなり近しい人物らしいな。で、これをあんたはなんて説明したんだ？」

リーインに突然水を向けられ、ナルレイシアは「えっ、とぉ……」と口ごもった。

どうやら、その図案にはやはり特別な意味があるようだ――リーインの表情は真剣そのものだ。

なのに、それを自分が表現した言葉というと……。

「……三日月が背中で汗掻いてるみたいな……？」

一瞬の沈黙――。

そして、寝台の上で盛大に咳き込む音と、大爆笑する美声が部屋に響き渡ったのはほぼ同時のことだった……。

7

リーインは困惑の面持ちで目前の美貌の青年を見つめていた。
寝台のそばの椅子に腰を下ろした青年の手には深皿――右手には箸が握られている。
そしてずずず、と音をたてているのは……青年の口のなかに消える麺だ。
（いつものことながら……見たくない光景だ……）
リーインのために用意された栄養食を代わりに片付けてくれるのはありがたいのだが、目の前で食べるのはよしてほしい、と思ってしまう。
これが晩餐にでも出されるような料理であったなら、食べる姿も目に楽しかろうが、彼が食しているのはナルレイシア特製の『庶民のための』とでも前置きがつきそうな栄養食なのだ。
世界の空を支える御柱といえ、元は人間――食事するのはおかしくないし、そこに楽しみを見いだしていたとしても奇妙なことではない。ないが、だ。
モツ入り雑炊をすする絶世の美青年、血の腸詰めの載った粥を美味しそうに頬張る絶世の美

青年、蒸し鶏をはじめ具たっぷりのスープ麺をすする絶世の……以下略。

目眩がしそうな光景だ。

しかし、問題の青年――ネイスリーズはリーインの複雑な心境には気付かぬ様子で、相変わらず美味しそうに今度はスープをすすっている。

「うん、美味しい。小鳥姫はなかなか料理が上手だね……なのに、本が絡むと途端に家事放棄してしまうんだから勿体ないというか……」

満足そうにつぶやいた彼は、ふと気付いた風に顔を上げた。

「せっかく小鳥姫が作ってくれた料理なのに、食べられなくて残念だねえ」

同情も露な目を向けられ、リーインはがっくりと肩を落とした。

「……別に、頼んだわけでもありませんし……」

気にしてほしいところはそこではない――が、言うのもなにやら空しい。

「言えばいいのに。いまは通常の食事ができる状態じゃないんだって」

ずるずる、ずるずる――麺をすする音と美声が、交互に聞こえる。

「どういうことだって突っ込んでくるに決まってるじゃないですか。説明する手間を考えたら黙って貴方の世話になってる方がましです」

本来ありがたい御柱の恵みなのだが、いかんせん見目のよろしすぎる同性との接触行為が楽

しいはずもなく、口調はどうしても苦いものになってしまう。
「まあ、結界術師というのは謎が多いからねえ……わたしだって、『気泉』なんて言葉は初めて聞いたし。それを損なったら純粋な気しか口にできないだなんて、大変だねえ」
あくまで他人事と思っているのが明らかな、ネイスリーズの暢気な声に、しかし苛立ちは覚えない。
こちらの世界にあっては理解し難いことだということはわかっているからだ。
気泉とは、結界術師が結界を構成する力の源である。幼少時からの修行で、意識の中に作り上げられたその源泉から、結界術師は結界を練る力を引き出す。
一度作り上げられた気泉は、肉体とは別の次元に認識されているもので、本来は怪我などでは損なわれることはない。今回は同門の兄弟子を相手に結界同士をぶつけるなどという禁じ手を使ったせいで、気泉にまで被害が出たのだ……こんなことは、祖国を出て以来初めてのことである。
しかし、そのあたりの詳しい事情までは語るつもりはないリーインである。
「死にかけでもしない限りは大丈夫なんですよ」
だから言われるほど大変でもない——と言いかけたリーインに、しかしネイスリーズは無情にも「死にかけたものねえ」と言葉の刃を放ってくださる。

皮肉のつもりで言ったわけではないことがわかるだけに返す言葉がない。
口をつぐんだリーインを気にする風もなく、美貌の柱神は深皿を傾けスープを飲み干した。
そうして、「じゃあ、始めようか」と切り出され、リーインは内心ため息をついた。
これからの行為が、純然たるネイスリーズの厚意に因るもので、恵みだと受け取るべきことだとはリーインにもわかっている。充分すぎるほどにわかってはいるのだ。
しかし。
「どこがいい？」
にこやかに笑いながら差し出された柱神の右手は、ほんのりと光を放っている。
自然に存在するのとは桁違いの『気』が溢れているのだ。
リーインの損なわれた『気泉』と傷ついた肉体を癒すための力である純粋な『気』が。
問題なのは、その右手に直接触れなければこの身に取り込むことができないという現実だ。
「……いつものように、左手でお願いします」
答える声は、どうしても重くなる。
だが、ほかに方法はないのだ……仕方ない。
息を洩らしながら、のろのろと掌を上に左手を差し出すと、ネイスリーズが「そこまでイヤそうな顔をしなくてもいいだろうに」とぼやきながら、右手を重ねた。

触れた掌が熱を帯びる――そうして、光としか認識できないなにかがそこから流れ込んでくるのを感じる。

全身が微熱を帯びた錯覚を覚えながら、リーインは確実に癒えていく自身を確信する。

（なんという力だ……）

明らかに人間には練り得ぬ純粋で強大な力――目の前にいるのは、確かに人間と同じ姿をしていても非なる存在であることを実感させられる。

そして、その度に思うのだ――これほどの力を以てして初めて天地の狭間……『空』を支えることが可能だというのなら、『空』とはなんと脆いものであろうかと……。

（いかんな、純粋過ぎる気のせいで、思考がらしくもなく真面目なほうに引きずられる。世界だのなんだのを考えるなんて柄じゃないってのに……）

そんなことを思いながら苦笑すると、ネイスリーズがなにを思ってか、「ところで」と声を掛けてきた。

「君は、小鳥姫の『三日月の汗』発言が向こうにどういう影響を与えると思う？」

真摯な声に、リーインは知らず背筋をのばした。

この宿の主人――果ては黒鷲城の現在の主が、彼女の洩らした一言にどんな思いを抱き、どう反応するのかと……なぜ自分に訊くのかとリーインは首をかしげた。

「いや、侯爵代行の青年を直接知っているのは君だけだからね」
「知っていると言っても、たった二度会っただけですよ」
しかも仕事の話しかしていない。
到底役立つ経験とも思えないと答えると、ネイスリーズはゆっくりとかぶりをふった。
「……それでも、噂でしか知らないわたしなどより、君の考えがより正解に近いと思うからね……なにも試験しようというわけじゃない。単純に、君が会った青年……アシュアイードといったかな。彼ならどう判断し、どう動くか……想像してみてくれないか？」
そこまで言われては答えないわけにはいかなかった。
リーインは結局自分を捨て駒として扱った青年の顔を思い出す。
褐色の髪に病弱さを示す白い肌――だが、長い睫に縁取られた瞼の奥に輝く一対の翡翠は、底知れぬ光を宿していたように思う。
穏和な空気、優雅な立ち居振る舞いの奥に見えたと思った猛禽の影――今ならあれは錯覚ではなかったと言い切れる。
アシュアイードは、優美な黒鳥を装った黒鷲だ。
鋭い爪と嘴を隠し持っている。
彼はこの奇妙な四人連れ――自分も含まれていることを思うと心中複雑だが、胡散臭さ爆発

の一行だと思うのだ――をどう受け止めるのか……。

（本物の柱神。突然の来訪。女神縁の品。『二日月に汗』から連想されるに違いない『聖印』が刻まれた胡琴……そして、この時期……）

「信じるか信じないかは別として、表面上はごく丁寧に迎え入れるとは思います。そして、こちらの真意がどこにあるのか、冷静に見極めようとするでしょうね……本来であれば」

だが今は――事情が多少異なる。

大切だと言い、無理矢理にでも保護しようとした義弟は、現在何者かの手に陥ちている。アシュアイードが敢えて餌として放り込んだのだ。

（それでも……）

義弟を気遣う彼の様子に偽りの影は見えなかった。

恐らくは彼は獅子身中の虫を駆逐するために、最も有効な手段としてウォルセンを相手に投げ与えたのではないかと思う。

次期侯爵として――一族を率いる者としての当然の判断。そこに情を差し挟む余地などなかったのではないかと。

だが、もしもそうならいまのアシュアイードの頭は、一刻も早く義弟を取り戻すことで一杯のはずだ。

面倒な『至尊の客』にかかずらっている精神的余裕はない。

「いまは……行っても無駄でしょうね。取り込み中であることを悟らせるような真似はしないでしょうが、丁寧に『お引き取り願』われちまうのが関の山でしょう。第一、目的がウォルセンだっていうのなら、留守を訪ねても意味がないでしょう」

リーインの言葉に、ネイスリーズは「ふむ」とうなずいた。

「聖印の子供、ね……。確かにそれは下手を打ったら一族が割れかねない危険な火種だ。それだけに、ひとつだけ気になることがある。リーイン、君の目から見て、次期侯爵殿は義弟くんをどの程度大事に思ってるように感じたかい？」

すなわち、いかに状況が転ぼうとも取り戻そうとするのか、それとも場合によっては虫ごと切り捨てようとするのか。

言外のネイスリーズの問いに、リーインは数瞬考えた後、はっきりと答えた。

「あくまで勘にすぎませんが、次期侯爵は義弟を見捨てることはないと思います。というか、いま起こっていることも、義弟をそばに取り戻すにあたって邪魔になる害虫を一斉駆除してしまえって感じですから」

「……噂以上に溺愛してるのかな」

「どんな噂か知りませんが、執着はしているように見えましたね」

「そうか」

うんうんとうなずくと、ネイスリーズがぽん、とリーインの肩を叩いた。

なにやらイヤーな予感を覚えたのは……気のせいではなかった。

「じゃあ、リーイン、君はゆっくり快方に向かうよう、努力しておくれ。なに、気泉が回復するまではちゃんと面倒見てあげるから、それからは自力でね……そうだなぁ、移動できるようになるまで、あと一月ほどかかってくれると嬉しいかな」

リーインの感覚では——もちろん、ネイスリーズからの気の補給を受けてという前提だが——移動できるようになるまで、あと十日というところだ。

気泉が復活した後は完全自力での回復にしても、そうなれば気の流れを調整することで治癒を早めることは可能だから長くて二十日もあれば徒歩で移動するのに支障はなくなるはずだ。

それに一月かけろ——ということは。

「わざと治癒速度を落とせ、と……？」

それは苦痛を長引かせる行為だと知っての……ああ、元人間の御柱が知らないはずがないかと、リーインはがっくり項垂れる。

「ゆっくり回復した方が、一度悪化するよりは楽だろう？」

さらにとんでもない発言を口にした柱神を前に、リーインは額に手を当てた。

気のせいではなく頭痛がした。

（やる……予定より早く回復したら、このひとは絶対悪化させて時間稼ぎをする！）

こんな悲しい確信など抱きたくはなかったと、切ない思いを噛みしめる。

「……一月、ですね……」

諦めて念を押す彼に、美貌の柱神はにこやかにうなずいた。

「そう……だから、努めてゆっくり養生すること。いいね？」

こんな恐ろしい笑顔は生涯二度と目にしたくない――その時リーインは本気で思った。

「ようやく御出立か……」

黒鷲城の奥の私室で、アシュアイードはイェイシスに派遣した部下からの報告書に目を落としながら呟いた。

柱神ネイスリーズが重傷の男を連れてイェイシスを訪れてから、一月半近くが経っている。

つまり、それだけの時間が、護衛である青年の回復にかかったということだ。

部下からの報告には、青年を診察した医師の所見も添付されていた。

そこには、生きているのが奇跡としか思えない状態からの驚異的な回復ぶりだと書いてあった。通常であれば三ヶ月は起き上がることもできない大怪我であった、とも。

「さて、別の護衛を呼び寄せることなくその男にこだわったのは、その人間離れした治癒能力のせいか、それとも実力が飛び抜けているのか……まあ、急ぐ用でもないと思われたのだろうが、よくひとつの街で退屈なさらなかったものだな。ガライラのネイスリーズさまといえば、ひとつ所に留まるのが苦手な方だと聞いた覚えがあるのだけれど……」

まあ、『金糸雀苑』の主も絶句したという驚愕の美貌を思えば、護衛もなしにほいほい出かけられるわけもないから、じっと我慢していたのだとも考えられる。

（まあ、本人だけなら精霊の力を借りて、どこにでも好きに動かれるのだろうが……ネックになったのは連れの少女たちかな？）

どちらも見目のよい少女だという話だから、彼女たちの安全を図る上でも、青年の回復を待つ必要があったのかもしれない。

アタラクシアに関わる計画のただ中で聞いた柱神来訪の情報だっただけに、警戒しすぎていたのかもしれない、とアシュアイードは苦笑した。

なんにせよ、柱神という存在は世界に愛されているのだな、と思う。

この知らせが届くのがあと十日も早かったら、申し訳ないが途中で足止めさせてもらうとこ

ろだった。

アタラクシアを叩き潰す最中に来られては困るどころの騒ぎではなかったのだから。

ふう、とアシュアイードは息をつく。

この一月あまりというもの、気の抜ける時がなかった。

逃げ道をすべて塞ぎ、完膚無きままにアタラクシアを潰すための準備は整っていたにも拘わらず、ウォルセンがどこに隠されているのか、それだけが摑めず、じっと息を潜めて時を待っていた。

あれほどに息苦しい時間は久しぶりに味わわされた。

(けれど、ようやく終わった)

アタラクシア本家へと警邏隊を差し向けるのとほぼ同時にウェルスの別荘に別の部隊を突入させた。

一度砕けた結界は、こちらが雇った結界術師にも簡単に解除できるものだったから、障害はなにもなかった。

マルシアス侯爵エルセイド殺害容疑とウォルセンに関する拉致監禁容疑での逮捕されたウィーカルドだが、すでに罪は確定している。

彼が自分に仕掛けようとした罠など稚拙なものだ。

（本当の罠とはね、罠だと誰にも気付かれぬように仕掛けるものだよ、ウィーカルド）

遅きに失する忠告を、アシュアイードは微笑みながら胸中で呟く。

長いこと、目障りに思い続けてきたゴミを、ようやく綺麗に片付けることが出来て、アシュアイードは満足だった。

これで……もう、ウォルセンをそばにおくことで、ラルクティア家の当主に苦い顔をされることもない。

（あとは、ディー、君の無事をこの目で確認さえすればこの一件はお終いだ）

その瞬間こそが待ち遠しい。

警邏隊に保護されたウォルセンは、真っ直ぐにこの黒鷲城に連れて来られる予定だ。

（ようやく……君を取り戻すことができた……）

喜びはまだ、実感できるほどには強くない。

恐らく、ディー――ウォルセンの姿を目にするまでは、心底から歓喜することはない。

だから、胸が焦がれるほどに、その刹那を待ち望んでしまうのだ。

と、その時、部屋の扉が控えめに叩かれた。

「アシュアイードさま」

「帰ってきたのかい？」

穏やかさのなかにも隠しきれぬ喜びを宿した声で問いかけるが、答えなどわかっていた。
「はい、ようやくのお戻りでございます」
「すぐに行く」
そう言い、アシュアイードはイェイシスから届けられた報告書もそのままに椅子から立ち上がった。
帰ってきた小鳥に「おかえり」と告げるために――。

(ああ)
保護されてすぐに乗せられた馬車がどこに向かうのかに気付いた瞬間、ウォルセンの胸に湧き上がったのは深い安堵の念だった。
黒鷲城。
マルシアス侯爵領最大の街アシャスの中央にそびえ立つ勇壮な外観を誇る城を初めて目にした日は、そこがこんなにも安心できる場所になるなどとは想像もしていなかった。
(アッシュがいる……)

彼のために離れなければならないと思う気持ちに変わりはないというのに、正直な心は彼の存在にこんなにも浮き立ち、喜んでしまうのだ。

着替えをすませ、通された部屋ですでに待っていてくれた親友の翡翠の双眸を目にした瞬間、ウォルセンの胸に熱いものがこみ上げた。

（泣くだなんて、子供みたいだ……）

そう思うのに、溢れた涙が止まらない――。

（アッシュは微笑んでいるのに……）

ぽろぽろと流れる涙を拭ってくれたのは、足早に近づいてきたひとつ年上の親友だった。

「ようやく帰ってきたね……お帰り、ディー」

やさしい光をたたえた瞳は、真っ直ぐに自分を見つめている。

「あ、た、ただいま……アッシュ」

喉が詰まって、うまく言葉が紡げないが、そんな自分の様子さえ嬉しそうに笑みを浮かべるアシュアイードの存在がただ嬉しくて、ウォルセンもそっと指先で彼の頬に触れた。

翡翠の瞳の青年も、伸ばされる指を避けようとはしない。

だが、一瞬不快げに眉宇をひそめたかと思うと、彼は乱暴にならない程度の性急さでウォルセンの手を摑んだ。

その眼差しが注がれているのが手首だと気づき、ウォルセンは慌てた。
十日ほどとはいえ、枷に繋がれていたそこには、うっすらと痣が出来ていたのだ。
「だ、大丈夫だからっ！　見た目ほど痛くはないんだ、本当だからっ！」
脳裏に甦るのは、数年前に親友が口にした爆弾宣言――。
「だから……アッシュ」
わざと痣を作るような真似だけはしないでくれと、必死に目で訴えかけると、アシュアイードが一瞬目を瞠った。
そうしていかにも可笑しそうに肩を震わせると、耳元に顔を近づけ、こっそりと囁いた。
「心配しなくても、こんな意味深長な痣までお揃いにするつもりはないよ」
その言葉に、ほっと胸をなで下ろしたウォルセンは、しかしいきなり手を摑んだまま歩き出した親友の動きについていけずに転びそうになった。
咄嗟にその体を受け止めてくれた親友は、「すまない、薬を塗らないと気が急いてしまって」と謝った後、そのままウォルセンの体を抱きしめた。
耳元に届く声には、心からの安堵が宿っている。
「君が無事で……本当に、よかった……」
自分にしか気づけないだろう程度に湿った声に、ウォルセンはゆっくりと目を閉じ、「うん」

とうなずいた。
「心配かけて、本当にごめん……」
背中に回った腕に力がこもるのを感じながら、彼はもう一度つぶやいた。
「ただいま、アッシュ」
と――。

8

朝夕こそ涼しい風が吹くようにはなったものの、まだまだ昼間の陽射しは厳しい晩夏のある午前中、ディエーン南部最大の街であるアシャスを守る石造りの街壁を見上げるふたりの少女の姿があった。

正確には、旅装束の四人連れのうちのふたりが、口をぽかんと開けて四五階建ての建物ぐらいの高さの堅固な石壁をぽかんと見上げているのだ。

「……すっごく高いですね……こんなに高いんじゃ、近くの低い建物なんか、光が入らないんじゃないでしょうか……洗濯物が大変そうですよね」

ごくごく庶民的な感想を口にするのは、赤茶の癖毛をひとつにまとめた少女――アゼルフィアである。

下町で暮らす彼女にとって、日照時間はかなり重要な問題らしい。

「ほんと……すっごく高い……うわぁ、上で見張りに立ってるひとってば尊敬に値するわ。わ

たし無理、絶対無理。目眩起こして落ちるの確実……それで数ヶ月間寝台に縛り付けられる羽目になるのよ……」

高所恐怖症であることを最早隠そうともせずに、ぶるりと震えてみせるのは、金髪に蜂蜜色の瞳を持つ、一見非の打ち所がない美少女である。

が、その発言内容の後半部分に、アゼルフィアが疑問を覚えた様子で異議を唱えた。

「落ちたら死ぬでしょう……普通」

この高さなら――。

至極もっともな意見に、しかし金髪の美少女――ナルレイシアは困ったような顔でかぶりをふった。

「絶対死なない……もしかしたらまた死線を彷徨うかもしれないけど、多分また川を流されてる途中でこっち側の岸に引っかかるかなにかして、戻ってきて、いっそ死んだ方がましなぐらい痛い思い味わうことになるかもしれないけど……この高さなら、ぎりぎり助かる確信があるわ……」

聞いた途端、アゼルフィアは間違って酢でも呑み込んだような顔になった。

その目が雄弁に語っている。

また死線を彷徨うかもって……またって、どういう意味ですか。

川を流されてって、何の川ですか。
こっち側の岸って、こっち側って……。
などなど、尋ねてはみたいが、聞きたくない答えが返ってくるのが目に見えているので尋ねるに尋ねられないという思いが顔に出ている。
「……あー、じゃあ、間違っても上ったりしないで下さいね。いつ落ちるかとはらはらするのは遠慮したいですから」
「うん、頼まれても上らない。けど……ほんっとに高いわねぇ。このあたり、地震とかないのかしらん？　崩れたらって思うと怖いわ」
またしても飛び出した不穏な台詞に、アゼルフィアはふう、と息をついた。
「お願いですから、縁起でもないこと言わないでください。ナルレイシアさんが言うと、どんなあり得なさそうなことでも現実に起こってしまいそうで、わたしはそちらの方が恐ろしいです」
これにはナルレイシアが顔を顰めた。
「失礼な。ひとを悪い言霊遣い扱いしないでちょうだい」
言霊とは、言葉に宿る霊――すなわち力だと、だから紡ぐ言葉には常に気を遣うべきなのだと、東方出身のリーインが常々口にしていたものだ。

「悪い言霊遣い扱いなんてしてませんよ。存在自体が非常識な『不幸中の幸いの権化』のすることなすことんでもない事態を引き起こすに決まってるんだから、せめて悪い言霊を呼び寄せるような真似ぐらいは控えてほしいと思っただけです」

「アゼルフィア……もっと酷いこと言ってる……」

思わず泣きの入ったナルレイシアに、しかしここ数ヶ月で鍛えられた少女はびくともしなかった。

「酷くなんかないでしょう……ただ、単純に考えて、こんな高くて頑丈そうな壁に囲まれた街に入ってしまったら、なにか起こった時に無事に逃げ出せるかどうか、ちょっと不安に思った年少者の多少の八つ当たりなんか、選定者たるもの、どんと受け止めてくれなくては」

なぜ、真っ先に考えるのが脱出経路なのか——とは、ナルレイシアも尋ねたりはしない。

不安要素はたっぷりありすぎるぐらいにある、今回のアシャス訪問なのだ。

その最たるものと言えば……やはり。

背後に立つふたりの青年の内のひとり——頭巾から黒髪が一房こぼれているほうに、つい目を向けてしまうのは……致し方のないことだった。

さりげなく、アゼルフィアが距離を縮めた後、こっそりと尋ねてきたのは——。

「……本当に、大丈夫ですか？」

顔が知られているんでしょう？

なのに、堂々と一緒にここまで来て、本当に大丈夫なのか、と。

問いかけてくるアゼルフィアに、ナルレイシアも胸を張って「大丈夫」とは答えられない。

「んー、多分……？」

「多分!?」

少女の眦が怒りにつり上がる。

「や、ネイスリーズさまが大丈夫だって保証して下さったから、多分だけど本当に大丈夫……のはず。ほら、エアランの『白鷺館』の中庭で、風霊たちが光の加減に細工して、閃公のことを綺麗に隠していたでしょう？　あれと原理は同じで、目に映る情報を誤魔化すんだって仰ってたから……だから、多分大丈夫」

理由を説明したところで、やはり完全にばれないという確信はなくて、思わずへらりと笑ってしまったナルレイシアに呆れたのか、アゼルフィアはわざとらしく息をついて見せた。

「わたし……この先二度と、柱神さまとかその縁の方とかに夢は見ないことにします。こんなに……こんなに成り行き任せで動いてらっしゃるだなんて知ったら、柱神さまやその縁者さまに夢見てる人間の心は救われません。どん底です。わたしの綺麗な夢を返してって、大声で喚きたくなります！　でも返してもらえっこないのわかってるから、夢を見ない……それが最善

なんです。そうですよね!?」

途中から、なんだか鬼気迫る勢いで問いかけてきたアゼルフィアの心境がいかなるものか、正確なところはナルレイシアにはわからない。

しかし、出会って以来の騒ぎと、そこで知り合った神殿関係者及び『至尊』の存在であるはずの方々の性格やら言動を思い出すだに――ここで都合良く自分がその面子に入っていることはナルレイシアの脳裏からは除外されている――気持ちはわからないでもない、と思ってしまった。

だから――。

「……かもしれない」

と答えた時、背後の青年ふたりが、なんとも微妙な表情を浮かべたことに気付くことはなかった。

人間、誰しも自分のことを自分が一番わかっているわけではないのである。

街門をくぐると、そこには活気に溢れた街並みが広がっている。

さすがは南部一の大都市というべきか、アシャスの広い通りには、さまざまな人種、年齢の人間が行き交っている。

その様子を見つめながら、黒髪の青年――イェイシス滞在中、ネイスリーズがどうやってか手配した身分証にはライエン・エンディ・ロージスという名が記されている――は、そっと前を歩く人外魔境もとい人外の美貌を誇る相手に問いかけた。

「……大丈夫でしょうか？」

目的語を省いたのは、なにも含みあってのことではない。

彼が不安に思う材料は、いまやひとりに限られているため、口にする必要性を覚えなかっただけのことだ。

それはネイスリーズにもわかっているのか、万年超絶美青年は、頭巾を目深に被ったまま、口元に笑みを浮かべた。

「大丈夫でしょう。ライ、君は知らないかもしれないが、アシャスの治安はこの規模の街としては飛び抜けていいんだよ。間違っても人さらいの類が白昼堂々出現する心配はない」

そう言って、彼が向けた――であろう――視線の先には、眩い金髪の少女がいた。

隣を歩く少女によって『ふたつ尻尾』と命名された両こめかみのあたりで結い、一部を長いまま残している変わった髪型をしたその少女は、アシャスの賑やかさを目にしてはしゃいでい

るようだった。

長く垂れた『ふたつ尻尾』部分がひょんひょんと揺れている。

その、警戒心のかけらも感じられない浮かれた様子に、青年――ライは苦い息を洩らした。

（ひとの気も知らないで……）

思考がつい、恨みがましくなってしまうのは、少女の尋常ならざる災難吸引率の高さを身を以て知っているからだ。

イェイシスからアシャスへの道中だけでも片手の指の数では足りない騒ぎに巻き込まれた――時には引き起こした――己の体質を、少しは自覚して欲しいと切実に思う。

（それでも大事にならずにすんだのは、ネイスリーズさまのご加護だってことを、あの娘はわかっているのだろうか……？）

わかっている――とは信じたい。

しかし、わかっているからと言って自重するような性格とも思えないから不安は尽きない。

「……大体、なんで雷馬で移動しなかったんです……」

空を飛んでの高速移動なら、少なくともあの少女の災難吸引率も引き下げられたに違いないのに――と続けた彼の言葉に、ネイスリーズが暢気な声で答えた。

「いや、それも考えないではなかったんだけどね。小鳥姫はどうやら極度の高所恐怖症らしく

て……閃公につけていた箱形の車も君のおかげで壊れてしまったことだしね。それならゆっくり地上を歩いて移動するのもたまにはいいかな、と。可愛い小鳥姫を怯えさせるのは本意じゃない」

人間の数倍の時を生きる柱神の目には、あの疫病神ですら「可愛く」見えるのかと、ライエンは内心ため息をついた。

（怯えて固まってくれていたら却ってありがたいと……言ったら睨まれるのだろうな）

いくら優美な外見をしていても、ネイスリーズは柱神だ。

しかも、七つある色彩属性の内、最も精霊の加護の強い紫属の君なのだ。冷ややかな笑みを向けられて、怒りの雷撃など受けたくはない。

「……それで、向こうにはいつ、知らせを送るのです？　まあ、すでにこちらの動きは筒抜けになっているでしょうが、そうと悟らせるわけにはいかないのでしょう？」

少しだけ声を潜めたのは、なにもわざとではない――習い性というやつだ。

「別にわざわざ知らん顔をする必要もないと思うよ。精霊に親しむ人間というものは、確かに珍しいが稀有というほどでもない。わたしがここにいることは、すでに彼らには伝わっているはずだから、向こうから迎えが来たところで驚くべきことじゃない……わたしのこれまでの経験上、何度もあったことだからね。おっとり構えていたらいいんじゃないかな……と」

突然、何かに気付いたように、ネイスリーズが空を見上げた。
その拍子に外套の頭巾部分がずれ、驚異の美貌が露となり、周囲に衝撃が走ったのだが、当の本人はまるで気にする様子もない。
それどころか、ふ、と柔らかい笑みまで浮かべたものだから、衝撃度は大きくなるばかりだ……がくりと肩を落とし、ライエンは額を押さえた。
（あっちが騒ぎを起こさなくてほっとしてたら……あなたが起こしてどうするんですか!?）
しかし、いまさら取り返しはつかない。
起こってしまったことは、なかったことにはできないのだ。
はあぁ、と深く息をついた彼のそばで、気持ちよさそうに空を見上げていたネイスリーズが嬉しそうに呟いた。
「素直な……いい音色だ。これは名目以上のいい土産になったかもしれないな」

黒鷲城の一室――テラスに続く硝子戸を開け広げた室内には、街の残暑が嘘のような涼しい風が入ってくる。

その部屋の長椅子に、ぐったりした様子で体を横たえた青年が、ふう、と息をついた。
「ディーの部屋はいつもながら気持ちがいいね……精霊の加護とは素晴らしい」
夏になる度に、似たようなことを口にする親友の相変わらずの様子に、ウォルセンは水差しから氷水をグラスに注いで手渡した。
「アッシュは夏に弱いんだよね……だからって、冷たいものばかり飲んでたら、体の芯が冷えてますます体調を崩しやすくなるんだからほどほどにね」
「そう言いながら氷水をご馳走してくれるディーが好きだよ。うん、美味しい……この氷も精霊が持ってきてくれたのかい？」
半身のみを起こし、グラスを傾けるアシュアイードの様子は心底寛いでいるといえば聞こえはいいが、だらしないと言えなくもない。
しかし、こんな姿を見せるのが自分とアライセイドの前だけだと知っているウォルセンは、だから咎めようとはしない。
夏に弱いはずの親友が、少し前まで自分のために気を張り詰めていたことを知っている。そして今も侯爵代行として、さまざまな仕事に追われている彼に、少しぐらいの休息は必要だと思うからだ。
「これは裏庭の井戸の水で作ってもらった氷だよ。水もそう。あの井戸の水が一番美味しいん

だ。水量が多くないから、あまり使われてないみたいだけどね」
「それは知らなかったな……今度、わたしの部屋の水もそれにするよう頼むかな？　ああ、でも温かったら味は落ちるか……」
　がっかりした様子のアシュアイードに、「まだこの時期は生水は避けた方がいいよ。素直に淹れてもらったお茶を飲むように」と言うと、翡翠の瞳の青年は、拗ねたように唇を尖らせた。
「……せめて、薬草の匂いのないお茶ならねえ……」
　夏になると体力の落ちるアシュアイードのために、夏場に用意されるお茶には必ず滋養補給の意味をこめて幾種かの薬草がブレンドされるのは、子供のころから変わらない。
「文句言わないの。アッシュのためなんだから……」
　子供のように拗ねる親友の相手をするのは、実は嫌いではない。
　常に大人の顔を保たねばならぬアシュアイードが、甘える素振りを見せられる相手は限られており、しかもそれが許されるのはごくごく短い時間だからだ。
　アタラクシア家の起こした事件の残務処理はまだ続いており、アシュアイードがこうしてウォルセンの部屋に避難していられるのは半時ほどだ。
（せめて今ぐらいは、好きにさせてあげたいって……小母さまあたりが聞いたら、甘やかし過

ぎるなとか小言が飛んでくるかな）

などと埒もないことを考えていると、甘えモード全開のアシュアイードが「ディー」と呼びかけて来た。

「うん？」

振り向くと、長椅子に再び寝そべった青年が、飾り棚の上に置かれたあるものを指さしていた。

胡琴だ。

四本の弦が張られた四胡とも四弦とも呼ばれるそれは、ウォルセンがロスタロイドの屋敷に移されるまで、ずっと弾いていたものだ。

ひくり、と頬が引きつるのを感じた。

「久しぶりにディーの四弦が聴きたい……」

「駄目！」

出来ることならなんでもかなえてあげたいところだが、こればかりはうなずけない。

「どうして!?」

よほど意外だったのか、アシュアイードががばりと身を起こした。

「鈍ってるから！　指が追いつかなくて音が飛ぶ！」

非常に優秀な耳を持つ親友は、同時に辛辣な批評家でもある。
下手な演奏など聴かせたら、どれほど落ち込まされることか……想像しただけで背筋が凍りそうだ。
「かまわないから」
「そう言って、アッシュが本当に構わなかったことはないから駄目」
「極力控え目に言うから」
「やっぱりミスしたら指摘する気満々なんじゃないか！」
過去の経験に照らし合わせれば、彼の『控え目』など到底信用できない。
しかし……やはり過去の経験に照らし合わせるまでもなく、ウォルセンは最終的にアシュアイードには敵わないのだ。
「ディー……」
呼ぶ声に、懇願の響きが宿る。
ウォルセンがどうにも逆らえない声音だ。
「ディー」
もう一度名を呼ばれ、アシュアイードが悲しげに目を伏せて「どうしても……駄目かな？」などと言う姿を目にしたが最後――。

はあ、と大きく息を洩らして、ウォルセンは飾り棚に近づくしかなくなるのだ。
「本当に下手になってるんだからね」
後で聴くんじゃなかったとか言わないように――。
念を押すと、アシュアイードは満足そうに頷いた。
「なんのかんの言っても、結局絆されてくれるディーが大好きだよ」
(……おれは、そんな自分が情けないよ……)
声に出さないつぶやきは、けれどアシュアイードには届いているに違いない。
諦めの境地で、ウォルセンは胡琴を手に取った――。

9

監視が付いているのは承知の上であったから、アシャスで一番の宿に着いた時、マルシアス家からの使いが待っていたことにはさほど驚きはしなかった。

さすがは侯爵家の使者である。

ネイスリーズの人外の美貌にも、ほんの一瞬固まっただけで、すぐに優雅な仕種で礼を取ったことにこそ、ナルレイシアは驚かされ、感心したのだ。

差し出された白い封筒は金の箔で縁取られており、一見しただけで差出人が相当な身分のものであることがわかった。

ネイスリーズはその場で封を解くと、やはり上質の紙の便せんに綴られた文字に目を通した――宿の玄関ですることではないが、彼の圧倒的な存在感が、誰にも文句を言わせない。というか、周囲は見とれて正常な思考を働かせることができなかったのだ。

そうして、文面を読み終えた柱神は、使者に向かって「お言葉に甘えよう」と声をかけた。

その瞬間、ナルレイシアたち四人のアシャスにおける滞在場所は、侯爵家の居城である黒鷲城に決定したのである。

（うわあぁぁ）

黒鷲城の豪華な接客室で、ナルレイシアはぽかんと口を開けていた。

幸いネイスリーズの背中に隠れていたので相手には気付かれなかったが、隣の黒髪の青年がやんわりと足を踏んできたことから、彼には見られたのだと悟り、少しばかり恥ずかしくなった。

（恥ずかしい……というか、見て見ぬふりぐらいできないものかしらん？　女性に恥をかかせるものではないと、誰も教えてくれなかったのかしら……）

などと八つ当たり気味なことを考えていたナルレイシアは、しかしすぐにそんなことに気を取られている場合ではないと意識を切り替えた。

（そうだわ、ここで美人さんに見とれてる場合じゃないのよ！　わたしには、ウォルセンさんに翠唱子を押しつけ……じゃない！　ウォルセンさんに翠唱子を受け取ってもらえるよう説得

するという大切な使命があるんだから！）

この場に人目がなかったら、両手で頬をはたいて活を入れたいところだが、生憎そういうわけにはいかない。

なのでナルレイシアは気付かれないように、ぎゅっとこぶしを握りしめることでその代わりとした……両隣の青年と少女の呆れた視線はこの際無視だ。

（それにしても……）

と、改めて出迎えてくれた青年に目をやる。

褐色の髪は手入れが行き届いていてつやつやだ。

日に焼けていない肌はきめ細やかでシミひとつない。シミやソバカスに悩む世の女性達の嫉妬を一身に受けそうである。

やや細身ながらすらりとのびた四肢のバランスは絶妙で、顔が見えなくても立ち姿だけで注目を集めるに違いないと思わせる。

そして、顔だ。

（女性的な顔立ちというわけじゃないのに……なんで、どうして美人としか表現できないのかしら？　ウォルセンさんも綺麗だと思ったけど、このひとは何というか……あの翡翠の瞳はもう見とれるしかないというか……ああ、マルシアス家ってもしかして美形一族なのかしらーっ

っ!?)

それが彼女の、アシュアイードに対する第一印象だった。

そのことで、後に彼女は大いに悔やむ羽目になるのだが、それはまだ未来のことだ。

そう……遠くはない、未来の。

豪華絢爛——。

その存在を表現するのに、これ以上の言葉はない。

これがかつて、自分と同じ『人間』であったとは到底思えない——と、絶対的な存在感で狭くはない室内を圧倒する相手を見つめながらアシュアイードは思った。

(なるほど……これが世界を支える神たる者が放つ輝きなのか……)

そう思いながら、彼は自らの一族に伝えられる女神に思いを馳せた。

女神ファタランテ——妙歌星の異名を持つ奇跡の歌声で一族を破滅から救った伝説の女性。

彼女もまた目の前の青年と同じものであったというのなら、その存在感と力と輝きは、一族の者すべての魂に刻み込まれたことだろう。

彼女の残した希望の言葉が、代々語り継がれたのもうなずける話だ。
（とはいえ、ディーにとっては迷惑な話だったのだけどね……）
女神と同じ痣を持つ――『聖印の子供』として生まれ落ちたがゆえに、運命に翻弄された義弟のことを思う。
ようやく取り戻した義弟にして親友――アタラクシアという最大の獅子身中の虫退治は終わったとはいえ、『約束の地』という呪いにも似た言葉に、未だ関心を示す者は少なくない。
アシュアイードとしては忌々しい限りだ。
故郷を追われ、彷徨うばかりのころならいざ知らず、一族がこの地に落ち着いてから、すでに五世紀近くが経っているのだ。いまさらそんな言葉に縋る必要もないだろうに、一族の心は呪縛されている。
だが、それもあとわずかな間のことだ。
（約束の地はここに外ならないと、刻みつけてやるさ……ディーと約束したことだしね）
幼いあの日――『約束の地など知らない！』と、衰弱した喉から絞り出すように叫んだウォルセンの悲壮な声を、アシュアイードが忘れたことはない。
生まれて初めて心から欲しいと思った、優しい歌声を持つ小鳥。
その小鳥を追い詰めるのが大人たちの益体もないこだわりなら、そんなものは自分が壊して

自由にしてやるのだとそう決めた。

そうして、そのことを条件に、そばにいることを小鳥自身に認めさせた。

『約束の地は、僕が見つけてあげるから』

だから友達になって――と、口ではそう言ったけれど、一生共にいられるのなら、関係は何だってよかった。

その思いは今でも変わらない。

だから、今回のネイスリーズ一行の来訪は、あまりありがたいものではない。

アタラクシアの暴走の原因である『聖印の子供』ウォルセンに対する一族の関心は、未だ鎮(しず)まったとは言い難い状況にあるのだから。

そんな折に、よりにもよって『女神縁(ゆかり)の品』が届くなど、はっきり言って迷惑千万というものだ。

しかし、世界を支える柱神の来訪を断れるはずがない。

一連の騒ぎも一応の収束を見た時期ということもある。おろそかに扱うわけにはいかないのだ……。

(まるでそれを見越したかのように、南部中で噂(うわさ)を広めて下さったし……)

女神縁の品とは、聖印が刻まれた胡琴(こきん)である、と――。

これでは逃げ場はない。

しかも、それは間違いなくファタランテ縁の品なのだ。

包みを解かれ、中から現れた飴色の胡琴――四弦を見た瞬間、アシュアイードにはそれが本物だとわかった。

長い時を大切に保管されてきた独特な空気がそれを包みこんでいたのだ。そして、その琴筒の側面に施された紅珊瑚の螺鈿が描くものは、ウォルセンの左二の腕にあるものと同じ――翼ある緋色の蛇。

ファタランテの額に、そしてこれまで生まれた三人の『聖印の子供』にしか顕れることのなかったその徴が刻まれた、時経た四弦。

（間違いない……）

知らず、アシュアイードの口から感嘆のため息が洩れた。

真贋など、どうでもいいと思っていた。所詮は五世紀も前に存在していた、自分にとっては夢幻のようなものなのだ、女神など。

だから、彼女に縁のある品など、本当にどうでもいいと……そう思っていたはずだというのに。

心が震えるのは、薄くなろうとも未だに彼女に連なる血がこの身に流れるせいだろうか。そ

れともウォルセンが持つ『聖印』と繋がるからか……。

（このわたしですら、無感動ではいられない……女神を未だに信奉している一族の者がこれを見たら、いったいどのような騒ぎが起こることか……）

ウォルセンの顔が、また脳裏に浮かんだ。

厄介なことにならなければいいが――浮かび上がった懸念は、しかしアシュアイードが予想した以上に早く、しかも想定外の方面から現実と化した。

すなわち――。

「そう言えば、精霊たちがいつか楽しげに話しているのを聞いたのだが、こちらには今、妙歌星さまと同じ痣を持つ子供がいるそうだね」

ネイスリーズの爆弾発言に、アシュアイードは一瞬顔色を変えた。

すぐにうつむき、隠したつもりだが、人間ならざる者を相手に、どこまで通用するかはわからない。

どくどくと、胸が早鐘を打つ。

そんな彼の様子に気付いているのかいないのか、美貌の柱神はさらりと言った。

「街に入ってすぐに聞こえてきた四弦はその子の演奏だろうか？　素直で透明な心に響くいい音色だった……怠けていたのか、音が少しばかり飛んではいたけどね」

動悸はますます激しくなる。
黒鷲城の一室で弾いた胡琴の音色がアシャスで聞こえるわけがない——普通に考えれば、ありえない話だ。
だが、相手が柱神となれば話は違う。
まず間違いない——彼は確かに宙に溶けたウォルセンの胡琴の音色を拾ったのだ！
「無理にとは言わないが……」
ネイスリーズの言葉の先が読める——しかし、だからといって、アシュアイードには何も出来はしないのだ。
「よければ、彼に会わせて貰えないだろうか……この四弦を、是非彼に弾いてもらいたいのだよ」
ネイスリーズの声音はどこまでも優しく穏やかだ。
だからこそ、憎らしいとアシュアイードは思った。
他意もなにも感じられないこの申し出を、断る理由が何一つとして見つからないからだ。
その瞬間、アシュアイードがネイスリーズに対して抱いた感想は。
（神は神でも疫病神だ）
という、到底口にはできないものだった——。

ウォルセンは不機嫌を隠しきれぬまま、黒鷲城の長い廊下を重い足取りで進む。

「そんな顔をしないで……」

隣を歩く親友が、困った顔で注意してくるが、とても聞ける話ではない。

「だって、アッシュ……こんな時期に、そんな曰くのある品なんて持って来てくれるなんて……いくら相手が柱神さまでも恨みたくもなるよ……」

騒ぎは収束したとはいえ、水面下ではまだあれこれと不穏な動きがないではないのだ。

そんな矢先に、『女神縁の胡琴』などを持って現れるなど、嫌がらせとしか思えない。

もちろん、そんなことはあろうはずがないことはわかっているのだ。

いるのだ、が。

ふうぅぅ、と思わず深いため息が洩れてしまう。

（しかも、本物だなんて……）

アシュアイードが見て、そう判断したのだ——間違いはないだろう。

（その上、おれに興味を示した挙げ句、件の四弦を弾け、だなんて……）

「アッシュ……」
泣きそうな声で、親友を呼ぶ。
会いたくない。弾きたくない。
「ディー……気持ちはわかるけどね。お断りできる相手じゃないんだ」
出来るものなら断っていたに決まってる――翡翠の双眸に見え隠れする怒りの声が聞こえて来そうだ。
「……演奏だなんて……恥をかくだけなのに……」
アッシュだって、今のおれの腕前はわかってるだろうに――。
つい恨みがましい目になってしまうのは致し方のないことだ――さんざんねだって四弦を弾かせたくせに、終わった後この親友はミスした場所をひとつも洩らさず指摘してくれたのである。
「素直で透明ないい音色だったと褒めてらしたよ」
さすがに耳は確かだよねえ――感心したように言われたところで、心は浮上しない。
その『耳が確か』な柱神の前で、これから拙い演奏をしなければならないのだと思えば、ますます足取りは重くなり、ついには止まってしまった。
「ディー」

そんな彼に、アシュアイードが困ったように声をかけてくる。
「ディー……そんなに気が進まないようなら、指を怪我したことにでもするかい？」
今日のこの場を用意した親友からのあまりにも思いがけない提案に、ウォルセンは思わず顔を上げた。
「アッシュ……でも」
それはアシュアイードの顔を潰す行為だ。
その柱神が気にしないと言ったとしても、今日の舞台――というほどのものではないが――のことは家人は皆知っている。
それなのに、直前になって自分が指を怪我したことで取りやめになったと聞いたら……皆はどう思うだろう。
（駄目だ）
ぶるぶるとかぶりを振って、ウォルセンは唇を噛みしめた。
昔から勤めている家人もいることにはいるが、新しく入った者たちは、自分とアシュアイードが不仲だと誤解するかもしれない。
次期侯爵たる彼の体面を汚すために、わざと怪我したのではないのか。そもそも怪我などしていないのではないのか。

そんな憶測が水面下で飛び交うようになれば、第二のアタラクシアが出て来ないとも限らない……いや、それより先に、ラルクティアが動くだろうか。

どちらにしても、それだけは避けなければならない。

指をわきわきと動かしながら、ウォルセンは覚悟を決めた。

「……いいよ。恥のひとつやふたつ……どうせ、一度きりのことなんだから」

ため息を押し殺しそう告げると、なぜかアシュアイードが少し残念そうな顔になった。

「そうかい……？　演奏の代わりにディーの歌声を披露するのも手だと思ったんだけど」

翡翠の双眸が、悪戯っぽく輝いていた。

「却下！」

先日胡琴をねだられた時以上の激しい拒絶に、しかしアシュアイードは苦笑するだけだ。

「どうして？　わたしは好きだけど？」

わざわざ理由を聞いてくるあたり、厭味である。

「おれのは歌と呼べるような代物じゃない。そのことはアッシュが一番よく知ってるはずじゃないか」

睨みつけても効果はない――それでも意地の悪い親友に、笑顔で応じることはできなかったのだ。

それぐらい、ウォルセンは歌というものに対して劣等感を抱いている。

「……まあ、室内向きじゃないことは確かだけどね」

「屋外でもご免だ。あんなものを柱神さまの前で披露するぐらいなら、稚拙な指使いでも四弦弾くほうがよっぽどましだ！　話は以上！　ほら、行くよ」

それ以上歌のことを突っ込まれたくなくて、ウォルセンは足早にネイスリーズが待つという部屋に向かった。

やけくそとはいえ覚悟を決めたせいか、心は静かに落ち着きつつあった――。

ただし、それは部屋の扉を開くまでのこと。

更に正確に言うなら、部屋でふたりを待っていた面子を認めるまでのことだった。

まず、目に入ってきたのは、美貌などという言葉で括ってしまっていいのかどうか迷うほどの、圧倒的な美の化身の姿だった。

豪華、華麗、優雅、優美……どんなに言葉を連ねたところで、到底言い表すことなどできない存在自体が奇跡のような、『美』そのもの。

これまで、アシュアイード以上に整った顔は見たことがないと思ってきたが、そこにいたのは最早『人間』の範疇からは外れた美を纏う者、だった。

目にしただけで、圧倒される。

不意に、部屋を出る前にアシュアイードが口にした慰めの言葉を思い出した。
『大丈夫だよ、相手は柱神さまだからね、多少のミスがあっても緊張のあまりだと、皆勝手に判断してくれるだろうからね』
その時は「気休めを」と思って真面目に受け取らなかったが……あれは、正真正銘本気で言っていたのだ。
（確かにこの方の前で演奏するのに、緊張するなというほうが無理だ。下手したら見とれて指動かすのも忘れてしまいそうだ……）
しかも、誰もそのことを不思議に思いはしないだろう。
つまり、気負う必要など最初からなかったというわけで……。
（ひとりでぐるぐるして、おれが馬鹿みたいじゃないか。アッシュもアッシュだ。こんなことなら事前に教えておいてくれたら、少しは気も楽だったのに……）
肩の力が抜けたせいで、ついつい親友に対する恨み言を胸中でつぶやいたウォルセンは、しかし次の瞬間、視界の隅を過った金糸の輝きに目を瞠った。
ネイスリーズの髪――ではない。
確かに彼の柱神は金髪だが、緑味を帯びた、なんとも独特な輝きを放っているのだ。
純粋な金糸ではない。

（じゃあ、今のは……そう言えば、お付きの少女がふたりいるとかって、アッシュが言ってたっけ……）

では、その少女のうちのひとりなのだろうか。

見事な金糸の輝きは――しかし、なぜかウォルセンに不安を抱かせた。

（なんでだ？　別に金髪の誰かにひどい目にあわされた覚えなんか……）

なかったはず――そう思いかけたウォルセンはしかし、件の少女と目が合った途端、ぴきりと凍り付いた。

見事な金の髪……蕩けるような蜂蜜色の大きな瞳。

（……いたじゃないか）

愕然としながら、ウォルセンは自分の信じられない記憶の欠如を盛大に罵った。

ここ一月半ほどの騒動のせいで、すっかり忘れていたが、とんでもなく振り回してくれた金髪の人物は確かにいた。

というか――現在、なぜか柱神の背後から顔を覗かせている。

（なんで……いるんだ……？）

呆然と立ち尽くす彼の脳裏に、ひとつの言葉が不意に浮かんだ。

『災厄は忘れたころにやってくる』

金髪美少女の姿をした疫病神（やくびょうがみ）は、とうとうこんなところまで追いかけてきたのだと、現実を理解した瞬間、ウォルセンはくらりと目眩（めまい）に襲われた――。

巫女姫（みこひめ）の銀の指環

赤い髪、赤い瞳は魔術の民の血を引く証。

魔性の物が息づく世界――それらを封じ込める力を持つ魔術の民の数はあまりに少なく、それゆえに、その価値は王侯貴族とも並ぶと言われていた。

魔物に苦しめられる諸国は、競って魔術の民を雇い、中には買ってまで手に入れる者さえ出現した――それが『緋髪の民』と呼ばれる魔術師一族の不遇の始まり。

金に目の眩んだ人買い商人たちが、彼らを狙って暗躍し、彼らは散り散りになって身を隠さざるを得なくなった。ある者は髪を染め、またある者は別人の姿を自分に重ね――そうして緋髪の民は、世界の表舞台から姿を消したのだ。

けれど――。

彼らの血が絶えたわけではない。そして、それを狙う人間たちも――。

数が少なくなれば、価値は上がり、少しでも緋髪の民の血を引く者は法外な値段で売り買いされるようになった。

髪なり瞳なりが赤系統である者は、その体重とおなじ重さの銀。純粋な赤であれば、二倍。

両方が赤であれば……小国のひとつくらい、充分に購える値で売り買いされるのだ。

全く、受難の民としか、呼びようがない。

そんな世界の、そんな時代。

不幸にも純粋な緋髪の民を父に持ち、それゆえに街を歩けば人攫い(ひとさら)にぶつかる、という、実に頭の痛い境遇に生まれた、気の毒な少女の話を、ひとつ語るといたしましょう。

狙われた少女

「いやだ。また、だわ」
心底いやぁな顔をして、カリンは呟いた。
「また、狙われてる」
小さな宿場町――だから、安心していたというのに。彼女は緋色の髪を払って、ふん、と鼻を鳴らした。敵意に、これまた真紅の瞳がきらきら輝く。
「どうしたの、敵さん？」
連れのキースがのんびりした声で尋ねる。うん、と頷いてカリンはちらっと周囲に目をやった。
「それで、種類は？　仕事関係のやつ？　それとも、お前を狙ってるのか？」
と、キースが尋ねるのには理由がある。
カリンとキースと、もうひとりのリーダーのラジークの三人で組んで、ここ一年ほど、殺し

以外なら、何でも引き受けます——ただし、気に入れば。という条件がある——なんて、なかなか厄介な仕事をやっているものだから、けっこう敵が多かったりするのだ。

「ちょっと、待って。少し、頭の中、覗かせてもらうから」

そう言って、カリンは目を閉じる。意識を自分たちに向けて害意を放っている男たちに向けると、その思考を探る。

緋髪の民。連れも上玉。金になる。半年、遊べる。捕まえて、売っぱらおう。

ドロドロの、欲に塗れた思念に、カリンは吐き気を覚えた。別に私は、あんたたちの懐を温めてやるために、生まれてきたわけじゃないのよ、と怒鳴りつけてやろうかとも思ったが、馬鹿らしいのでやめる。

「本命は、私みたい。でも、キース、あなたのことも上玉だって狙ってるみたいよ」

どうする？　——目でそう問うと、キースは絶世の美貌を不機嫌に歪めた。

「俺は生憎、やつらの酒代を作るために、捕まって売られてやるほど、お人よしじゃないんだ」

「じゃ、逃げる？」

頷くようなキースではないと、わかってはいたけれど、一応尋ねる。

「逃げたければひとりでどうぞ。人を攫って売り払う、なんてけしからん料簡、二度と起こせ

ないようにしてやる。俺は正義感が強いんだ」

などと、殊勝なことを言うキースのダークブルーの瞳が、実に楽しげに輝いているのを、カリンは知っている。

「単に暴れたいだけでしょう?」

溜息を漏らして、カリンは言う。方向音痴の自分に、ひとりで勝手に逃げて、宿に帰るなんて器用な真似ができないことを知っているくせに、平然とそんなことを言うキースの性格の悪さが呪わしい。

「たまには運動しないと、体力が落ちるんだぞ、カリンちゃん」

いたずらっぽく囁くキースを、カリンは睨みつける。

「そう言って、三日前にもあなたは運動したじゃないの。わかってる? ラジークは、今日、仕事の依頼で出掛けてんのよ。怪我でもして、断る羽目になったらどうするの。もう、財布の中には、金貨一枚だって、入っちゃいないんですからね」

何でも屋なんて、はっきり言って、体力仕事なのだ。怪我でもした日には、干乾しになるしか道はない。そもそも、あまりトラブルの類とは、お友達したくないと思っているカリンは、何とかこの好戦的な相棒を思い止まらせようと必死なのだ。

だが、甘かった。そんなことで、食事よりも喧嘩が好き、と公言するキースが、諦めるわけ

はなかったのだ。

「誰が、雑魚相手に怪我なんかするかよ。見損なってもらっちゃ困る」

自信たっぷりの、その言葉。

カリンはふう、と息をつく。

仕方ないわ。と彼女は自分を慰める。キースと離れて、無事に宿に戻る自信なんて、まるきりないし、確かに、自分を売って手に入れる金で、遊び放題やろう、などと考えている男たちを、放っておくのも、何やらもったいな……違う、気に入らない。

そうよ、仕方のないことなんだわ。そう思う自分の瞳が、実に生き生きと輝いていることに、カリンは気づいていなかった。類は友を呼ぶのだと、彼女が認めるには、いま暫くの時間が必要だった。

「それで、相手は何人だ」

「五人……」

「じゃ、邪魔の入らない場所に、ご案内しなければな」

ふたりで囁きあって――。

そしらぬふりで、歩き出す。世にも稀なる緋髪の民の血を引く少女と、これまた滅多にない美形のふたり組は、自分たちを餌にして、人攫いを釣ろうとしていた――目的はもちろん、運

動不足解消、それだけなのである。

「全くねえ」

とんっ、と地面を蹴って、飛び上がりざま、カリンは苛立ちもあらわな声でぼやく。

「人がどんな姿をしていようが、あんたたちには関係ないでしょうに。私は……私は、できるだけ平和に、生きていきたいと思っているのに、どうして懲りもせずに、狙い回すのよ。おかげで、しなくていい喧嘩まで、する羽目になっちゃって、私はいい迷惑なのよ！」

シュルシュルッと、緋色の髪を、人攫いの首に巻き付けて、きつくしめあげながら、それでもカリンは文句をたれる。

「わかってんの？　え、何とか言いなさいよ！」

「カリン！　気絶した男相手に、ぶうたれる暇があったら、次の奴に取り掛かれよ。多勢に無勢なんだからな」

数歩離れたところで、派手に屈強な男を殴り倒したばかりの相棒が、見兼ねたように口を挟む。

「わかってるわよ！」

叫び返して、カリンは三人に減った、男たちに向き直った。

一番、凶悪そうな顔立ちの奴を、次の八つ当たりの相手に決めると、彼女は素早く駆け寄っ

た。体格的に、どう見たって不利なので、ここは素直に弱点を突かせてもらおう、と決める。そもそも、喧嘩にルールはない。おまけに相手は社会の害毒と呼んで差し支えない存在なので、遠慮する必要もない。

一瞬身を屈め、力を溜めて、跳躍する。力なぞ少々使って、相手の頭上まで、飛び上がって、両手でこぶしを作ると、そのまま顔面目掛けてふりおろす――しかし、相手も喧嘩慣れしているのか、咄嗟に腕で顔を庇う。

ちっと舌打ちして、一瞬空中に静止すると、今度はがら空きになった、男の顎に、手刀を打ち込む。

「ごめんね。でも、喉仏は狙わなかったから、そこんとこは感謝してね」

おざなりに謝って、ちら、とキースの方に目を向けると、彼の方は悠々と、ふたり目の鳩尾に、深々とこぶしを埋めていた。

「じゃ、あとひとりか」

つぶやいて、最後のひとりを見ようとした瞬間――！

背後から伸びた手が、カリンの髪を摑んだ。そのまま、ぐいと引っ張られて、バランスが崩れる。

「まぁだ、懲りてなかったの？」

首を押さえながら、それでもカリンの髪を摑んで離そうとしない男に向かって、彼女は肘鉄を食らわせる。

そこまでは、良かった。の、だが。

その一瞬に、隙が生じた。太い腕を、首に回されて、ぎりぎりと絞めつけられたのは、次の刹那のことだった。

頬に、冷たい刃の感触。

油断、しちゃったかなぁ。何しろ、残っていたのは一番弱そうな外見の男で、もしかしたら、怖じ気づいて逃げてくれたりするかな、なんて期待したものだから。

人間、外見で判断しちゃいけないってこと、キースでよくわかってるはずなのに。

「動くんじゃないよ、お嬢ちゃん。顔に傷をつけたくはないが、別に傷物でも構わないって金持ちも、世の中にはいるんだからな」

これは、本気だ。顔に傷、というのは、やはりご遠慮したいな、と思い、ちらっとキースに目をやった。

キースは、大仰に肩をすくめてみせると、真っ直ぐにカリンを見つめ、そうしてひと言こう言った。

「ドジ……」

全(まった)く、返す言葉がなかった――。

地下牢

石畳に響く、高らかな靴音が、カリンの意識を現実に引き戻した。
鳩尾が、鈍い痛みを訴える。
「そっか……あの後、一発食らっちゃったんだっけ」
目隠しと、手足に食い込む縄に、思い切り自己嫌悪に陥りながら、カリンはぽつりと呟いた。
「やっとお目覚めか……よく丸一日も、寝てられるな」
呆れを含んだその声は、彼女には聞き覚えがありすぎるもので……だから、それが誰のものか思い出したカリンは、思わず叫びそうになった。
「キース？」
「こんないい声、他に誰がいるっていうんだ」
皮肉をまぜた笑い声に、カリンは一瞬眩暈を覚える。

「なんで、あなたがここにいるわけ？」

と、これは至極当然な疑問。

キースの喧嘩の腕を、カリンはよく知っている。少なくとも——自分とは違って——あの程度の連中に、後れを取るような人ではない。

「お前が捕まったからに決まってるだろう？」

他に何があるっていうんだ、とでも言いたげな声だった。

「だから、何であなたまで捕まったのかって、私は聞いてんの！　あんな奴らに負けるあなたでもなければ、あの場から逃げられないわけでもなかったでしょう？」

「そりゃあ、勿論」

返ってきたのは、謙遜のけの字もない、けろりとした声で、ますますカリンは混乱してしまった。

「じゃあ、何で！」

「お前を放って逃げて、ラジークに嫌味を言われるより、一緒に捕まって、鮮やかな脱出をやってのける方が、性に合ってるからに決まってるじゃないか」

「そんなに簡単にコトが運ぶと、本気で思ってるわけ？」

溜息まじりに尋ねて、カリンは力なくかぶりを振った。

「当たり前だろ？　俺にできないことはない」

自信たっぷりな返事――あながち冗談でないところが、この相棒の怖いところだ、とカリンは知っている。

「でも、いったん引いて、私の居場所を調べてから実行に移す方が、随分成功率は高いと思うけど……？」

後ろ手に縛られた指先に、壁に生えた苔が触れる……水気をたっぷり含んだ感触に、カリンは思わず眉をひそめた。なんて、ジメジメした場所――まるで地下牢じゃないの。

そう思った時、隣でふぅ、と息をつく音が聞こえた。

「確かにな」

「キース？」

「確かに、そっちの方がうまいやり方だろうさ……だがな、カリンちゃん。ちょっと考えてみましょうね。お前が攫われました。場所がわかりません。さて、誰に聞けばわかるでしょう？」

まるで謎掛け……それとも、単にからかっているだけなのだろうか？

「ま、妥当なとこで、情報屋に当たるのが一番でしょうね」

キースの意図をはかりかねながらも、一応答える。

「よくできました。さて、世の中にはいったいどれだけ、無料で情報をくれるような奇特な情報屋がいるものでしょう？」
「そんなのいるわけないじゃない。情報売って生きてるんだから……無料奉仕なんて、干乾しになるようなコト……あ」
そこまで言って、ようやくカリンは気づいた。
異常に金遣いの荒いラジークのせいで、今自分たちの財布には、金貨一枚入ってはいないのだ……ラジークが仕事の話で出掛けたのだって、この町でひと仕事しなければ自分たちが干乾しになるのが時間の問題だったせいで……。
「了解。非常に切迫した問題だわね……」
「わかってくれて、嬉しいよ。とりあえず、俺たちの課題は、と言えば――」
わかるだろう？　そう、言わんばかりのキースの言葉に、カリンはこくんと頷いた。
「自力脱出を果たすことね。ついでに、慰謝料を相応にいただいて、宿に帰ったら、ラジークから財布を奪い取る、と」
そもそもラジークが、あれほど金遣いが荒くなかったら、金に困って、こんな苦しい状況に陥ることもなかったのだ――それでも、自分たちが喧嘩好きの虫を抑えていたら、人攫いに捕まるなんてコトにはならなかったのだということを、綺麗さっぱり記憶の隅に押しやって、カ

リンは思う。今度こそ、と――。

今度こそ、ラジークから財布を奪い取って、金銭管理をがっちりしてやるのだ、と。

「名案だな」

キースが隣でクスクス笑う。

「その前に、この縄をどうにかしないとな……脱出も何もあったもんじゃない」

「そうね」

同意して、カリンはちらり、と唇を舐めた。

「私もいいかげん、日の光を拝みたいわ」

意外なところに、意外な落とし穴、というものはあるもので。

カリンは悔しさに唇を噛みしめた。

「キース、あなたさっき、随分自信たっぷりに、できないことないって言わなかったっけ？縄抜けひとつできないなんて、恥ずかしいと思わないわけ？」

嫌味たっぷりに言ってやると、隣で縛られて転がっている相棒は、返事のかわりに鼻をフン、と鳴らしてみせた。

「だいたい、ナイフの一本や二本、どこかに隠し持っておくぐらいの如才なさが、何でも屋なんて仕事やってる人間には必要不可欠なんじゃないの？」

「生憎と、俺は流血沙汰が嫌いなんです。それに、必要もないのに、刃物なんて持ってることはないだろうが」

そのせいで、四苦八苦しているというのに、キースの口調はあくまで平静で、カリンは思わず食ってかかった。

「必要ない、ですって？　じゃあ、いったい私たちはなぜ、この縄ひとつに苦労してるっていうのよ。ナイフもないのに、縄抜けできるとでも、あなたは言うの、キース？」

「それくらい、わけないね」

「じゃあ、今してみせなさいよ！」

「それは嫌」

ぷつん、とカリンの理性の糸が切れたのはその瞬間のことだった。

「このホラ吹き！　馬鹿っ！　できもしないこと言って、希望持たせるなんて、最低！」

殴れるものならば、殴ってやりたかった。

だが、しかし。

手足の自由を奪われている今、それはできない相談だった。

「ホラなんかじゃないさ。だが、今、関節を外すわけにはいかないの……帰ったら、多分すぐに仕事が待ってるからな。体調崩して失敗したら、俺たち、本当に干からびるしかないじゃないか」

「それはそうかもしれないけど……」

だからと言って、このままでは、どこかに売り飛ばされてしまうじゃないの。

「私、中年のブクブク太った王様の後宮なんかに行くのは嫌よ」

「そうだな。相手が気の毒だもんな」

のほほんとした声で、そんなことを言うものだから、カリンは思わず気配を探って、キースの鼻先で気塊を破裂させてやった。

パン、と小気味良い破裂音が響く。

「馬鹿！　見張りが覗いたらどうするんだ」

「大丈夫よ。見張りはさっき通り過ぎたばっかりだし、近くにそれらしい気配はないもの。つまらないこと言ったあなたが悪いの。脱出の手段も考えないで、へらず口ばかり叩いてるから――」

「手段なら、考えた」

ぼそっと呟くキースの声に、カリンは耳を疑った。

「本当に？」
「こんな時に冗談言ってどうするんだ。本当だって」
つい疑わしげな声になってしまったカリンに、キースは不機嫌な声で答えた。
「何故、それを早く言わないの！」
「文句ばっかり言って、俺に口を開かせなかったのはどこの誰だよ」
と、言われて、カリンは一瞬うっと詰まった。
「……ごめん。で、どうするの？」
「お前の力を使うの」
「でも、縄を切るほどの力、私にはないわよ」
それができれば、こんなに苦労はしないのだ。緋髪の民の血を半分しか引いてない人間は——それでも、滅多にいるものではないのだが——やっぱり、受け継いだ力も、純血の民の半分以下、なのだ。
「切る必要はない。結び目を緩めるくらいは、わけないだろ？　それで充分だ。伊達に長年、こんなやばい仕事に足を突っ込んできたわけじゃないからな」
「まあ、それくらいなら……」
大丈夫、かなぁ。少々不安を覚えながら、カリンは必死にキースを縛る縄に意識を集中し

た。目隠しさえなければ、もっと簡単にいくのだが――緋髪の民は、闇の中でも物が見えるのだ――四苦八苦して、どうにか結び目を緩めるのに、ゆうに三十分を要したカリンは、終わった時、肩で息をついていた。

「視界に頼ってる分、見えなくなると辛いわね」

「なんの。これだけやれりゃ上等上等。待ってろ。すぐに自由にしてやるからな」

安心させるようなキースの声に、こくんと頷いて、カリンはふと思いつくままに問いかけた。

「キース」

「何だ？」

「聞きたいと思ってたんだけど、あなたの腕なら、あいつらやっつけるのは簡単だったわよね。私を人質にとられたって、それは変わらなかったはずでしょ？　どうしてわざわざ捕まったりしたの？」

「決まってる。あいつは本気だった……女の顔に傷なんか残させられるか。ああ、取れた、ほら」

最後の言葉は、カリンの目隠しを外しながらのもので、視界を取り戻したカリンは、ほっと息をついた。

だが、すぐに顔をしかめる。
「日の光も入らないなんて、本当に地下牢じゃないの……陰気だったらないわ」
「全くだ」
キースが頷きながら、縄をといてくれる。
「で、だな。お仲間がひとりいるようなんだな」
なにげない口調で彼は言うと、つい、と指差した——ふたりから、数歩離れた場所を。
淡い、オレンジ色の光——。
カリンは息を呑んだ。闇の中で発光する赤い髪——それは緋髪の民の特徴で、目前に倒れている十七、八の少女は、自分よりは薄いに違いないけれど、紛れもなく、魔術の民の血を引いている、同族だった。
「同族に会うの、初めてなんじゃないか？」
キースの言葉も耳に入らなかった。
頼りない足取りで少女に近づくと、カリンはじっと、初めて会った同族を凝視した。
オレンジ色がかった金の髪、色素の薄い肌。かなり、血は薄いわね。でも、力はかなりのもの。品の良い、儚げな顔は美しくて、もしかしたら、貴族の娘かもしれない。
そう、思った時、少女の手首に光る銀の腕環が目に入った。

階位の低い占師などでは、身につけることさえ許されない、神聖文字の守護呪言を刻みこまれた装飾品を持つことを許された人間を、カリンは十人しか知らない。そして腕環に彫られた竜の紋は、広く知られたもので。

「キース……」

「どうした？　情けない声出して？」

怪訝そうな相棒を振り返って、カリンは告げた。

「この人、聖巫女姫だ……透視の司、だったよね、この町の宰相の娘って。それ、この人だ……」

感情の抜け落ちた声で告げながら、カリンは自分たちがとんでもない揉め事に巻き込まれてしまったことを悟っていた。そうして。

その時。

ゆっくりと、少女が目を開いたのである。

聖巫女姫

「アーセル・マーイ姫？」

まあ、間違いないだろうけど、一応念のため、と呼び掛けると、少女はこくんと頷いた。

やっぱりか……ことあるごとにトラブルを招き寄せる——或いは、知らず飛び込んでしまう、とも言える——自分たちの性格に呆れながら、カリンは溜息をついた。

アーセル・マーイ——見者の中でも最高位にある四人の司のひとり。加えて、この町の宰相コウロス・マーイのひとり娘だったとカリンは記憶している。

自分たちの緋髪の民に代表される魔術師が、術によって事を行う『動』だとすれば、術によって物事を見極める『静』——それが見者なのだ。どちらも存在自体が稀少という点を除いては、全くの好対照を成す。

まさか透視の司が、同族だったなんてね。この分では、他にもいるかもしれない。

そんなことを考えていたカリンは、アーセルの物問いたげな視線に気づいて、首を傾げた。

「何？」

「ひとつお尋ねいたしますが、ここはどこなのでしょう？」

今ひとつ、状況を把握しきれずにいるらしい。

「どこと言われても、ねえ。私たちも攫われてきた口だからわかんないのよね……ごめんね」

あまりに頼りなげな、不安そうなアーセルを前に、カリンは別に自分が悪いわけでもないのに、何か罪悪感めいたものを覚えてしまう。

年は、多分カリンの方が年下なのに、守らなくては、と思ってしまう。奇妙な感じ。

「いいえ、そんな……」

首を振って、アーセルが言葉をとぎらせる。

「私は、攫われてしまったのですね」

「まあ、そういうことになるのかな」

曖昧に答えながら、カリンはちら、とキースに目をやった。

単純に、攫われた、のひと言で片づきそうもない、と思うのだけれど……。目で、そう告げると、キースは同感、とでも言いたげに肩をすくめた。その瞳が実に楽しげに輝いていることに、カリンは気づいた。

喜んでる……完璧に、喜んでいる。

「そう、ですか……」
ほう、と息をついて、俯いたアーセルは、次の瞬間、びくりと肩を震わせた。
「どうしたの？」
「指環が……私の指環が……！」
傍目にもはっきりと、彼女の顔から血の気が引いたのがわかった。
「指環？」
首を傾げて、カリンはあたりに目を向ける。アーセルの様子から察するに、よほど大切な物なのだろう……落ちただけなら、自分は夜目が利くし、見つけてあげられるはずだ。けれど、いくら目をこらしてみても、それらしいものは見当たらない。これは、意識を失っている間に、誰かに抜き取られたとしか、考えられない。
「ねえ、お姫様、訊きたいことがあるんだけど……その指環って、そんなに大切なものなの？」
儚げで、この人のためなら何だってしてあげたい、とカリンは思うのだが、やはり、優先順位、というものがある。
指環ひとつのために、脱出の機会を逃すようなことは、避けたい。
「はい――」

悄然とうなだれながら、しかしアーセルはきっぱりと答える。
「あれは殿下からいただいたもので……もし、なくしたことが明らかになれば、お父様や殿下にまで、ご迷惑が……」
殿下――ってことは、くれた人は、多分王族ってことよね……唇に親指を当てて、カリンはこの町の王族の名前を思い浮かべる。
「王妃様から貰ったってわけじゃないよね」
「はい」
答えるアーセルの頬が、ほんのりと赤味を帯びる。これは……決まり、かな？　あと、この町で殿下と呼ばれる存在は、世継ぎの君しかいないのだから。
「まあ確かに、正式な発表の前に、婚約者とその証の指環が消えたとなれば、父親である宰相といい、王子といい、困ったことになるのは目に見えているな」
ぼそぼそと、キースが呟くと、アーセルが、ぎゅっとこぶしを握りしめた。細い肩が、小刻みに震えるのを見て、カリンは思い切りキースに肘鉄を食らわした。
「でも、そうなると、指環を取り戻さないわけにはいかないわね……」
ぺろりと舌を出して呟いたとたん、アーセルが顔色を変えた。
「そんなこと！　会ったばかりの方を巻き込むわけには参りません！」

「だって、事情を聞いたのに、放っておくわけにはいかないわよ……そんなこと、できるわけないじゃない」

本当は、自分でも不思議なのだ。こんなに、何かしてあげたくなるなんて。だって、とカリンは思う。こんなに綺麗で、儚げな人が、不幸になるのを黙って見てなんか、いられない。

「けれど……」

あくまでしぶるアーセルに、カリンはもうお手上げである。が、引くわけにもいかない……これはもう、口が達者で頭も廻るキースを頼るしかない！　そう思った時、以心伝心とばかりに、キースが口を開いた。

「ただで厚意を受けるのが心苦しいというのなら、俺たちを雇えばいいんじゃないか？　どうせ、ひとりでどうこうできるようなことではないと、あんただってわかってんだろう？」

「ですが……」

「あのなぁ、お姫様。遠慮ばかりしてちゃ、世の中渡って行けないぜ。必要な時には必要なだけ、したたかになるもんだ……人間、幸せになる権利は、誰だって持ってるんだからな」

とびきり魅力的なウインクひとつ。

アーセルは少しの間黙りこみ、そうして、顔を上げた。

「雇わせて、いただきます。お礼はお望みのままに」

「内容は？」
「私の無事と、指環の奪還を――。それ以外、何も望みはいたしません」
「まかせといて」
にっこり笑って答えると、カリンはキースに感謝をこめた視線を送った――。

「ところでさ、お姫様。あんた呪具なしで力は使えるかい？」
「まあ、多少なら……でも、それが何か？」
闇の中で、白い首筋を浮き上がらせて、アーセルが首を傾げる。
キースは、見張りの気配が近くにないことを確かめて、ぽん、とカリンの頭を叩いた。
「いやね、こいつって、あまり『視る』の得意じゃないわけ。あんたはその点専門家だし。脱出するにも建物の構造はわかってるにこしたことはないし、指環を誰が取ったかぐらい、知ってた方が、こっちとしても仕事がやりやすいもんでね」
できる？　いたずらっぽい光をたたえた瞳が、そう尋ねる。
アーセルは静かに目を伏せて、頷いた。
「それくらいであれば……」
少し時間がかかるかもしれませんが。

そう言って、瞑想に彼女が入ったのを確かめて、カリンはそっとキースに耳打ちした。
「ね、ここ、たかだか人攫いの持ち物にしては、造りが頑丈すぎると思わない？　そのわりに、見張りは少ないし」
「気づいてたのか。多分ここはどこかの貴族の屋敷の地下なんだろう。楽しいことになりそうな予感がしないか？」
囁く声の弾んでいること。
「流血沙汰はごめんよ」
どうせ止めたってきかないんだから。
半分以上諦めて、カリンは譲れぬ一線を提示した。喧嘩までは、それなりに楽しいことは認める。でも、人死にだとか、流血騒ぎは、絶対に嫌だった。
「当然、当然」
やったとばかりに、嬉しそうにキースが頷いた瞬間――。
「そんな……そんなことが……！」
狼狽しきったアーセルの呟きが、闇を震わせた。
「見取り、わかったの？」
何か様子がおかしいアーセルを、カリンは覗きこんで尋ねた。アーセルは真っ青な顔を彼女

に向けて、こっくりと頷いた。

「もはや、視る必要はありません……私はここを知ってます。ここは……」

苦しげに顔を歪めて、彼女は告げた。

「ここは、私の屋敷です……」

宰相の館

「鍵開けぐらいならね、造作もないことだわ」
「お前の場合、開けるんじゃなくてブッ壊すんだろうが」
からかいを含んだキースの言葉に、カリンはふん、と鼻を鳴らした。
「要するに、出られればいいのよ」
したたかな笑みをたたえて、ぺろりと唇を舐めると、カリンは頑丈そうな扉の一点に意識を集中した。
「お静かに願いたいな」
「勿論、見張りを呼び戻すようなヘマはしないわ」
その言葉と同時に――。
バチン、と何かが弾けるような音が響く。
「ほら、もう開いちゃったわ」

「お上手、お上手」

パチパチと控え目な拍手を送って、キースがアーセルの手を取る。

「出ますよ。俺たちはあんたに雇われたんだから、あんたを安全な場所に連れていく義務がある。指環の件は、その後だな」

「安全な場所なんて……そんなものが、はたしてあるのでしょうか」

これまでずっと、一番安全だと信じていた場所が、そうではなかったのだとわかって、透視の司の姫君は、少々疑心暗鬼に取り憑かれているらしかった。

「何言ってんの。少なくとも、王子様はあなたの味方でしょ？　婚約者まで信じられなくなったら、人間おしまいよ」

ひそめた声で叱りつけると、カリンは扉に耳を押しつけた。

足音は聞こえない。

「大丈夫みたい、行くよ。キース、姫君の手を離しちゃだめよ」

「わかってるって」

魅力的な笑顔で応じて、キースはアーセルに目を戻した。

「人間全部を信用しろとは言わないが、信じられる人間がひとりもいないとなると、そいつはおしまいだからな。人間不信にはならないように。行くぞ」

「はい」
答えるアーセルの表情が、少しだけ明るくなった。
静かに静かに、扉を開ける。
「右に、進みます。それからふたつ目の角を左に曲がって……」
アーセルの案内にしたがって、気配を殺しながら歩く。
「で、ここの階段を上がれば地上ってわけね」
石壁にぴたりと身を寄せて、カリンは小さな声で尋ねた。そっと、階段のほうを窺えば。
「見張りだらけだわね……一、二……四人もいるわ。叩けば埃の出る身だって、宣伝してるようなもんじゃない。キース、何人片づけてくれる？」
「まあ控え目に見積もって、三人、かな？　お遊びはなしだから……お前は、お姫様を守るのが第一だから、ひとりってことで」
「了解」
短く答えて、カリンはアーセルの顔を覗きこむ。
「ちょっと乱暴だけど、突破するからね。見たくなかったら、目を閉じてて」
そのまま、返事も待たずに飛び出す。
「何者だ！」

誰何の声と、抜き身の剣のひと振りは、ほとんど同時だった。
「答えを聞くつもりがないんなら、尋ねるんじゃないわよ」
アーセルの頭を押さえ込みつつ、攻撃を避けると、カリンは男の顎に蹴りを見舞った。
グフッという男の声を無視して、カリンはアーセルの手を引いた。
「キース！　後は任せるからね！　さ、行こう」
面食らったふうの依頼主をぐいぐい引っ張ってカリンは階段を駆け上がる。
「で、出口はどっちだって？」
「あの方を、待たなくてよろしいのですか？」
「キース？　あの人なら大丈夫。方向音痴の私と違って、建物の構造とかにも通じてるからね」
伊達にやばい仕事、長いことやってるわけじゃないんだからね、安心していいよ。心配そうなアーセルにそう言って、カリンはぽんぽんと彼女の細い肩を叩く。
「さあ。王子様が待ってるんでしょ？　行くよ。出口、どっちだって言ってたっけ？」
尋ねると、アーセルは少し考えこむふうに俯いた。無言のまま、宝石を嵌めこんだ銀の耳飾りを外して、カリンの手に握らせる。
「この通路をまっすぐに進んで、最初の扉を開けて、左に行けば、使用人が使う勝手口に出ま

す。そこから逃げて。私は……私は、指環を失ったまま、あの方に会うなんてことはできません」

固くかみしめた唇は血の気を失い、決意をたたえた瞳は痛々しいほどだ。

「でも……生き残るのが先決でしょう？」

問いかけるカリンの前で、アーセルは頑なにかぶりを振った。

「私にとって、あの指環は命よりも大切な物……なくしたといって、どうして平気であの方にお会いできましょう。それに、私は、父が何を考えているのか、聞いておりません。聞かなければ……私はどうしても父の口からすべてを聞かなくては！」

思い詰めた目でそう呟くと、アーセルはさっと踵を返した。

「あ……ちょっと！」

カリンの制止の声も、彼女の足を止めることはできなかった。

「全く……真面目な人はこれだから。生きてればこそ、楽しいこともあるっていうのに！」

歯噛みして、カリンはこぶしを握りしめた。

「だからって、見捨てるわけにはいかないじゃないの！　貰う分は、働かせてもらわなくっちゃ！」

我ながら、律儀よねえ。

溜息まじりに呟いて。
カリンはアーセルの後を追った――。

今の今まで、アーセルの身につけられていた耳飾りは、カリンに彼女の居場所を教えてくれる。

「けっこう足の速い人よね」
ぽつん、と呟いて、アーセルの気配を探っていると、後ろから、足音がする。
追っ手？
ちら、と振り返ったカリンは、そこに相棒の姿を見出して、ほっと息をついた。
「おい、姫君はどうしたんだ？」
「父親に真偽を確かめるって走って行っちゃったわ」
「なんで行かせたんだ？」
咎める響きに、むっとしたカリンは言い返す。
「だから追い掛けてるんじゃないの。ぶつくさ言わないでよ。気が散っちゃうでしょ！」
「はいはいはい。それで、姫君はどこにいるって？」
「こっち――」

答えかけたちょうどその時、目の前に警備兵が飛び出してきた。
「邪魔、するんじゃない！」
カリンは両手でこぶしを握ると、男の膝頭に思い切り叩きつけた。
「痛ぁい！」
「カリン！　きりがないぞ」
「わかってる！　ちょっと待って――アーセルの動きが止まった……キース、手を……彼女のとこに翔ぶわよ！」
消耗がひどいので、瞬間飛翔なんて使いたくないのだけれど……非常時だから仕方がない。
「大丈夫か？」
キースが心配そうに尋ねる。クスッと笑って彼女はするりと彼の腕に自分のそれをからめた。
「大丈夫じゃないから、いーい、キース？　ちゃあんと私を守ってよ。そもそも私は行動担当じゃないんですからね」
「はいはい。責任もって、守ってやるよ」
「信用してるからね」
にっこり笑って――カリンは耳飾りに意識を集中した――。

ふう、息をついたカリンは、隣にキースがいることを確かめて、ほっと安心する。
「良かった……振り落とさずにすんだぁ」
「怖い奴だな。次からはお前に頼らんぞ」
実はすごく恐ろしいことを頼んでしまったのかもしれないと、後悔もあらわにキースが呟く。
まあ、ともかく、飛翔には成功したわけだわ。そう思って、ふっと目を上げると、アーセルが、驚愕に目を瞠って、自分たちふたりを見つめていた。
「なぜです？　私は自分のために、人が危険に晒されるのを見たくなくて……だから！　なのにどうして、あなた方は来たのですか！」
「黙って見てられなかったんだもの。仕方ないじゃないの」
にやりと、したたかな笑みに口元を歪めると、視界の隅に、自分たちを見る、四十になるやならずの男の姿が映った。
コウロス・マーイ――この町の、実力者。
彼がその人だと、カリンはひと目でわかった。コウロスはうっすらと笑みをたたえた顔で、娘を含む自分たち三人を認めると、高らかに笑い出した。

「なるほど。これで役者は揃ったというわけだな。ならず者ふたりに攫われて、アーセルは辱めを受けるよりはと自害する。わたしは必死に娘を捜したが、見つけた時、すでにアーセルは死んでおり、人攫いは抵抗したのでやむなく殺してしまった、と。脚本は完璧だ。あとは、お前たちを葬り去るのみ。何も知らずにおれば、異国に売り飛ばすだけで、命までは取るまいと思っておったのにな。首を突っ込んだお前たちの罪だ。自分たちの愚かさを呪うのだな！」

勝手なことを、コウロスは言った。カァーッと、頭に血が上るのを、カリンは感じた。

「勝手なことを言うんじゃないわよ、この狸親父！　何が不満で、実の娘の命を狙うのよ！」

「実の娘などではないわ！」

哄笑とともに告げられた言葉に、カリンは愕然とする。

「今、何と……？　お父様、今何とおっしゃいましたの？」

信じられない。

そんな思いもあらわに、アーセルが問う。

コウロスは禍々しい笑みに口元を引きつらせて言い切った。

「お前など、わたしの娘ではないわ！　先の宰相が、父親の知れぬ子を身籠った娘のために、私を婿に選んだだけのこと……家督も何もかも、すべてはお前に譲られるもので、わたしはそ

れまでの中継ぎにすぎん。巫女だから、結婚はするまいと甘く見ておれば、王子の求婚に簡単に乗りおって……ようやく、この地位を得たというのに、手放してなるものか！　死ね、アーセル！　そなたさえ死ねば、すべてはうまくいくのだ」

身勝手もここに極まれり。

そんな暴言を吐いて、コウロス・マーイはアーセルにナイフを投げつけた。

「避けて、アーセル！」

カリンの叫びは、しかし茫然としたアーセルの耳には届かないようだった。

ずっと、ずっと信じてきたであろう父の本心を聞いて、心が、凍りついてしまった姫君。もしかしたら自分の身勝手さを嘆いているのかもしれない――彼女は、避けようとさえしなかった。

「アーセル……姫君！」

カリンは叫び、彼女に駆け寄った。

「アーセル！」

それは、あなたの責ではないと、ただひと言告げるために。

カシン！

金属と金属のぶつかり合う音が、室内に響きわたったのはその瞬間だった。アーセルに投げ

られたナイフが、別の方向から飛来した短剣に弾かれて、床に落ちる。
「野望を阻まれたからって、責任転嫁なんて、そりゃあ男らしくない。男らしくない、卑怯な手口ってもんだ。なあ、コウロス・マーイ宰相」
ふてぶてしい響きをこめた、男の声に、カリンははっと息を呑んだ。
「ラジーク……」
キースの、呟きが聞こえる。
「ラジーク、ですって？」
身をもってアーセルを庇っていたカリンが、そろそろと振り向くと、そこに自分たちのリーダーの、のほほんとした顔があった。
「ラジーク！　何で、あなたが？」
「そりゃあ、オレの台詞だ。勝手しやがって……まあ、成功したからいいものの。次に勝手なことしたら、トリオは解消させてもらうからな」
にやにや笑いながら、二十代後半の、屈強そうな男が言う。
そして、その背後に控えるように佇んでいた男が、ずい、と一歩踏み出した。
「信じたくはなかったが……コウロス・マーイ。すべての黒幕はお前だったのだな」
輝く金髪は、高貴な生まれの証――。

二十二、三の青年は、ひと回り以上年の違う宰相を、きっ、と睨みつけて言った。
「我が生涯の伴侶を殺そうとした罪の重さは、いかようなつぐないも、受け入れぬと知るがいい」
「王太子殿下……」
コウロスが、脱力して膝をつき、そう呟く。
「殿下……シャルヴァーズ殿下！」
短い叫びとともに、アーセルが恋人の胸に飛び込んだのは、その瞬間のことだった――。

エピローグ

「ま、すべての不幸の原因は、宰相が自分の娘の性格を誤読したってとこにあるな」

一枚、二枚と王子からの礼金の金貨を数えながら、ラジークがのんびりした声で言う。

「あれだけ優しい娘が、実の親じゃないからって、育ての親を見捨てるような真似するはずないって、わからなかったのが、奴の最大の敗因だ」

「要するに、人を見る目がなかったんだよ。馬鹿な野郎だ」

と、キースが身も蓋もないことを言う。

先代の宰相の娘婿として、マーイ家に入ったコウロス。だが、妻とした娘はすでに身籠っており、彼は自分が、世間体のためだけに、生まれてくる子供の父親に仕立てあげられたことを知ったのだ。そうして、マーイ家の財産が、その子供の成人と同時に、彼の手から離れてしまうことも。

生まれてきたのが女だとわかった時、コウロスはアーセルを殺害することを心に決めた――

彼女の結婚相手に、マーイ家の全財産が譲られるのがわかっていたからである。だが、彼女が五歳の時、世にも稀なる『見者』の素質を持っているのがわかり、彼は計画を変更した。巫女であれば、結婚はすまい、と思ってのことだった。

「で、王子様と婚約した時に、計画を元に戻したってわけね……腹黒いなー。あの人、娘が攫われたって、必死で捜してるふりしてたんだって？　自分に疑いがかからないように準備を整えてからじっくり殺そうだなんて、性格悪いわ。アーセルもかわいそうに……父だと信じていた人に、命を狙われるなんて」

別れた時の巫女姫の、沈んだ表情を思い出して、カリンはふう、と息をつく。

「あのお姫さんは大丈夫だよ。王子がついてるからな……あの男なら、彼女の心の傷も癒せるさ、きっと」

慰めるような口調のキースに、カリンは笑顔を向けた。

「そうね。世の中、善人ばかりじゃないけど、悪人ばかりでもないし、人間って、けっこうしたたかだもんね」

「そうそう。それに、ひとまず干乾しになる恐怖は去ったわけだし、俺たちは俺たちで、楽しくやりましょうや」

「そう、ね」

カリンはちろ、とラジークに目を向けた。
金貨を数え終わって、彼は革の財布を懐にしまいこもうとしていた。
「あ、ラジーク！　テーブルの下に一枚落ちてる」
「え？」
そんなはずは、と呟きながら、テーブルの下を覗きこもうとするラジークに、一瞬の隙。
素早く財布を奪い取って、カリンはにっこり笑った。
「これは、私が預かっておくわね」
もう、お金に困って、干乾しになる恐怖を味わうのはまっぴらだもの。そう言うと、ラジークは思い切り顔をしかめた。
「オレはリーダーなんだぞ？」
「とびきり金遣いの荒いことを除けば、それなりに上等なリーダー、ではあるよな」
キースがにやにや笑って言う。
「そうそう。だから、その唯一の欠点をカバーしてあげようとしてるんじゃない。ね、キース、私たちって、いい仲間よね」
「世界中探したって、こんなリーダー思いの仲間、見つかるもんじゃないぜ。感謝するんだな、ラジーク」

ふたりで、悪意のかけらもない——ように見える——笑顔で言う。
ラジークは頭を掻きむしって、ぼそっと毒づいた。
「悪魔……」
その後、宿屋の一室に血の雨が降ったかどうか——それは定かではない。

あとがき

いつまでも残暑が厳しいと思っていましたが、日の入りは確実に早くなり、「秋の日は釣瓶落とし」という言葉を実感する今日この頃、皆様如何お過ごしでしょうか。

とは言っても、この本が発売される頃は秋真っ盛りなのですが（笑）。

こんにちは、前田珠子です。『天を支える者』緑の章第五巻『緑の鈴を、振る』をお届けいたします。

そして、まず先に謝らせていただきます――前巻のあとがきで「緑の章の最終刊は絶対このタイトル！」と書いておいたくせに……本当に申し訳ありません。

最終刊になってません。

続いてます。本当の最終刊のタイトルは『空に響く緑の鈴音』になります（プロットはできているから、次回こそ大丈夫！）。

あまり間を置かずお届けできるよう、引き続き原稿に向かいます。

さて、今回ようやくマルシアス家における騒ぎに決着がつき、晴れて自由の身となったウォルセンとナルレイシアの翠唱子を巡ってのやりとりに進展を……と思ってましたのに、なぜか思ったほど進んでません……。

と言いますか、マルシアス家の事情に想定以上にページを費やしてしまうことに。『緑蘿』にて初登場したウィーカルド氏が元凶です。妄執に近い『聖印』信奉者――と設定した自分を今回ほど憎んだことはありません（泣）。担当さんに「粘着質なキャラで新鮮でした」と言っていただいたのが唯一の救いでしょうか。

次回こそ、さくさく進めて終わらせます。やはり、ナルレイシアが動いてくれないと話が進まないことを今回再認識させられました。次回は彼女が動きます！　暴走気味なぐらい動いてくれる予定ですので、どうぞご期待ください。

今回諸事情で、収録されることとなった『巫女姫の銀の指環』は、なんと十九年前に雑誌で発表した作品です。

ここまで古いと意識的には過去というよりは太古に近いです。下手に触れたら作品の雰囲気を壊しそうで、結局雑誌掲載時のままの形で収録することとなりました。

近況です。

以前のあとがきで触れたクリスマスローズの『ニゲル』ですが、結局無事に夏を越させることができませんでした。原因は根腐れ……乾燥に強いとは知りつつも夏の熱気で葉がしなびる度に水を与えたのがいけなかったのかもしれません。けれど、『冬の貴婦人』の異名を取るクリスマスローズは大好きなので、今度は路地植えで夏越えに挑戦したいと思ってます。

今回も、明咲トウルさまをはじめとする関係各所の皆様に、大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

次こそ緑の章完結編です。

また、次の本でお会いできますように――。

平成二十年　秋

前田珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

〈初出一覧〉

「緑の鈴を、振る」……書き下ろし
「巫女姫（みこひめ）の銀の指環」……別冊Ｃｏｂａｌｔ　１９８９年４月20日号

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101―8050
東京都千代田区一ツ橋２―５―10
集英社コバルト編集部　気付
前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



天を支える者
緑の鈴を、振る

COBALT-SERIES

2008年11月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　太田富雄
発行所　株式会社集英社

〒101—8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230) 6268 (編集部)
電話　東京 (3230) 6393 (販売部)
(3230) 6080 (読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2008　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601225-6 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！

前田珠子 〈天を支える者〉シリーズ

イラスト／明咲トウル



天を支える者

天を支える者2

天を支える者3

天を支える者4

天を支える者 古懇唄

天を支える者 古懇唄2

天を支える者 古懇唄3

天を支える者 古懇唄4

天を支える者 古懇唄5



天を支える者 罠は、蜜の味

天を支える者 緑風に誘われ

天を支える者 緑の糸をたどって

天を支える者 緑蘿の檻に囚われ

天を支える者 緑玉の枷に繋がれ

〈好評発売中〉 コバルト文庫

二度はないと誓った、この愛が痛い。

前田珠子 〈空の呪縛〉シリーズ

イラスト／明咲トウル

空の呪縛

『針の森』に住む美しい女柱神フィオルシェーナは、恋の誘いを頑なに断り続けていた。それは、過去の過ちを繰り返さないため…。恋獄の楔に絡めとられた女神の愛の物語！



柱神フィオルシェーナの前に、かつての恋人の生まれ変わり、ファナルシーズが現れた。運命が、二人をあざ笑う。

空の呪縛

月の堕ちるとき

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者

聖石の使徒
其は力を放つ者

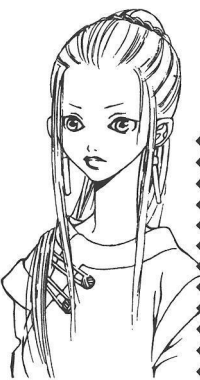
聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ

聖石の使徒
揺籃の瞳

聖石の使徒
蒼の組木箱

聖石の使徒
狩人の爪





〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子 〈魅魍暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魍暗躍譚

碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魍暗躍譚

月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／厦門 潤



漆黒の魔性
白焔の罠
柘榴の影
紫紺の糸（前編）（後編）
翡翠の夢1～5
鬱金の暁闇1～3
女妖の街 破妖の剣 外伝①
ささやきの行方 破妖の剣 外伝②
忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③
時の螺旋 破妖の剣 外伝④
魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤
呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

〈好評発売中〉 コバルト文庫

もう絶対離さない……何があっても。

伯爵と妖精

誓いのキスを夜明けまでに

谷　瑞恵
イラスト／高星麻子



リディアが負った傷を治す秘薬を手に入れるため、エドガーは「あるじ」の眠る島へ向かった。しかし、ある危険を冒さなくてはならず!?

伯爵と妖精シリーズ・好評既刊

あいつは優雅な大悪党
あまい罠には気をつけて
プロポーズはお手やわらかに
恋人は幽霊（ゴースト）
呪いのダイヤに愛をこめて
取り換えられたプリンセス
涙の秘密をおしえて
駆け落ちは月夜を待って
女神に捧ぐ鎮魂歌（レクイエム）
ロンドン橋に星は灯る
花嫁修業は薔薇迷宮で
紳士の射止めかた教えます
紅（くれない）の騎士に願うならば
誰がために聖地は夢みる
運命の赤い糸を信じますか?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

守龍世界の未来は――!?

乙女は龍を光に導く!

榎木洋子
イラスト／牧あさか



ギースを火龍の長に見定め、説得を続ける理花。それを阻止したいアシュトレーの妨害が続くが…!? 暴走乙女の龍の長探し、完結！

――〈乙女は龍を導く!〉シリーズ・好評既刊――

乙女は龍を導く!
乙女は龍を抱く!
乙女は龍を目指す!
乙女は龍を駆る!
乙女は龍を結ぶ!
乙女は龍を喚ぶ!

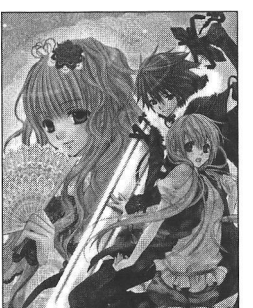
〈好評発売中〉 コバルト文庫

結婚なんて絶対イヤ！

聖獣王の花嫁（クロスティア）

リィリィ姫の謀略

高遠砂夜
イラスト／起家一子



剣の大会の優勝者が姫君の花婿になるというメイベル国。試合は八百長のはずなのに、突然現れた少年・アシューターが優勝して…？

〈聖獣王の花嫁（クロスティア）〉シリーズ・好評既刊

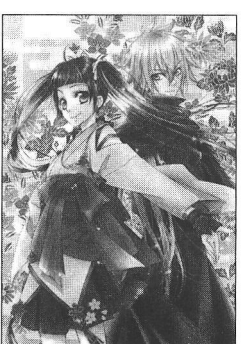
聖獣王の花嫁（クロスティア）
剣を継ぐ姫
アルティナスの迷宮
破滅を告げる使者
黒衣の王女
闇水晶の檻
エルシュローザの矢
螺旋（らせん）の風

〈好評発売中〉 コバルト文庫

「お友達」は魔族の王子様!?
和洋折衷ふしぎコメディ開幕！

神巫うさぎと俺様王子の悩ましき学園生活

藤原眞莉
イラスト／鳴海ゆき



格式ある巫女一族に生まれながら、超平凡で地味な少女・美和。高等部の入学式の日に、超美形だけど超傲慢な魔族の王子・エルドが現れ、大迷惑で大騒ぎな毎日が始まって!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

野望が、私たちを結びつける…！

封印のエスメラルダ

約束の海 紺碧の絆

山本 瑤

イラスト／香坂ゆう

国王の庶子で盟友のアドリアンが、ついに王位を継ぐことに！ しかし、彼の命の危険を感じたクラウディアは、王都を目指して…？



〈封印のエスメラルダ〉シリーズ・好評既刊

封印のエスメラルダ

封印のエスメラルダ 夜明けを告ぐ魔女

封印のエスメラルダ 黒伯爵と野いばらの森

〈好評発売中〉 コバルト文庫

あなたの全てを知りたいの…!!

約束されたガーディアン・プリンセス

花衣沙久羅
イラスト／早瀬あきら



愛しているが別れたいと告げられたヴィヴィアン。しかし、夫の過去を知り、放っておけなくて…？　真相が、次々に明かされる…！

――〈ガーディアン・プリンセス〉シリーズ・好評既刊――

ガーディアン・プリンセス
盗まれたガーディアン・プリンセス
求婚されたガーディアン・プリンセス
恋におちたガーディアン・プリンセス
誘惑されたガーディアン・プリンセス

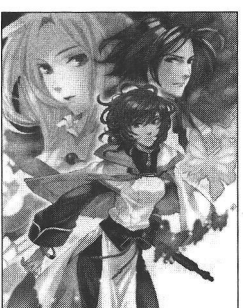
〈好評発売中〉 コバルト文庫

行く手を阻むのは、異国の使者!!

流水宮の乙女

漆黒の風とはかなき花の面影

片山奈保子
イラスト／Chiyoko



素性を隠して旅に出た飛沫と龍月。訪れた都で獅子龍神に使える巫女・珠玉の用心棒を依頼されるが、彼女を狙う幻術使いが現れて…?

〈流水宮の乙女〉シリーズ・好評既刊

流水宮の乙女 ゆらめきまどう炎の縁
流水宮の乙女 うごき始めた運命の音色

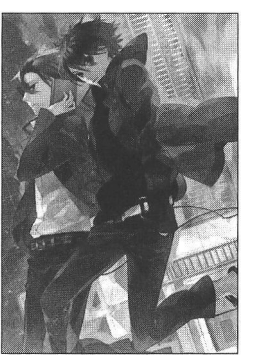
〈好評発売中〉 コバルト文庫

2008年度
ロマン大賞
受賞作!!

大事なあいつのために、
俺はなにができる――?

屋上ボーイズ

阿部暁子
イラスト／カズアキ



悩み多き高2の和也。ある日、学校の屋上で親和と出会う。単純な和也と飄々とした親和は、次第に屋上でつるむように。しかし、和也は親和が抱える秘密に気づいてしまい…?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

2008年度
ロマン大賞
受賞作!!

教えて。本当の君はだれ？
若き術師たちの友情と冒険!!

ラーザリューンの少年術師 片翼のきみ

みなづき志生
イラスト／加藤絵理子



難関試験を突破し、名門印術学院に入学したクラウ。「天才だが傲慢」と評判のサフィアスに出会い親交を深めるうち、彼に噂とは違う印象を抱くが…？
ロマン大賞受賞作!!

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の書き手を目指す方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人発掘の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!?

大賞入選作 正賞の楯と副賞100万円(税込)

佳作入選作 正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿95枚~105枚。
【しめきり】毎年7月10日(当日消印有効)
【応募資格】男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】締切後の隔月刊誌「cobalt」1月号誌上(および12月刊の文庫のチラシ紙上)。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2-5-10 (株)集英社 コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる**「ノベル大賞・読者大賞」**(読者大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円)の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿250枚~350枚。
【しめきり】毎年1月10日(当日消印有効)
【応募資格】男女・年齢・プロアマを問いません。
【入選発表】締切後の隔月刊誌「cobalt」9月号誌上(および8月刊の文庫のチラシ紙上)。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2-5-10 (株)集英社 コバルト編集部「ロマン大賞」係

応募に関する詳しい要項は隔月刊誌Cobalt(2月、4月、6月、8月、10月、12月の1日発売)をごらんください。

9784086012256

ISBN978-4-08-601225-6

C0193 ¥438E

定価 本体438円＋税

1920193004380



コバルト文庫

緑属の柱神候補、ウォルセンを愛してやまない3人の人物がここに真っ向対決!? ウォルセンをどうしてもアタラクシア家の次期当主に収めたいウィーカルド、彼は自分の傍にいるべきだと固持し続ける幼なじみのアシュアイード、彼に何がなんでも柱神になる運命を受け容れてもらいたいナルレイシア…。それぞれの理由を胸に目指すは「ウォルセン陥落」ただそれのみ。「愛の逃走劇」は佳境へ突入！